

ツンブクツ 第一部

序 ある事故

春の連休。その年は出勤する二日が飛び石となって休日に挟まるが、代休にかえれば十日連続の休みを楽しめる。多くの勤め人は長期休暇を取ろうとこの二日を年休に振り替えた。

始まると期待通りの天候だった。涼しく乾いた風は頬を優しくぬけ、新緑と明るい日差し、戸外に遊ぶ者は優しい春を楽しんだ。

北関東の小さな市サノウの駅アーケードに店を構える樋田美容室、飛び石挟みの二日にも閉じることなく、連休をとおしてなじみ客に店を開けていた。「お出かけ前のセット」で軽く調髪する客、「休みには都心へ買い物おしやれ」を求める常連の客に便宜を図った。

休日も店を開けようとは奈津子の提案だったが、ひききりなしの来客、普段の入りも超える客に樋田誠二もことのほか喜んだ。

最終日は月曜、五月六日。その午後に夕日が替わり客の流れは途絶えた。夕べ前にはすっかり手が空いた。残るのは後かたづけに床掃除、気のゆるみで誠二は箒を手立ちくらみ、奈津子もめまいにしゃがみ込む疲労に襲われた。

しかし疲れは心地よく、夫婦は客のいない店内で一息ついた。人の汐目の向き替わり、二人の休暇はこの夕から始まる。

閉店のカーテンを引く奈津子は、窓の陰からアーケードを覗いた。人の行ききは多かった。夫婦者、家族連れ、老人子供、年齢も服装も雑多であるが網に引かれる小魚のように、皆が沈黙し息をゼイと漏らして歩いていった。疲れているとは引きずる足で分かる。腰落として膝を抜かし、くるぶしも崩れたうつむき歩き。帰り路の見慣れた地べたをただ目で舐めて、家に向かっていた。

無言の老人、子供の行進には、夕暮れすら声を潜めた。

なま暖かい風がアーケードにぬけ、美容室の半開きの戸をすり抜けた。膝の裏をフーツと抜けたなまぬるい風の悪戯に、奈津子はピクンと背筋が伸びた。「ヨツチャン」と呟いた。

樋田夫婦二人のささやかな休暇は、アーケードに人の動きが消えた六日、月曜の遅い夕方に始まった。明けの火曜は定休日、連休中にも開店した火曜の代休を水曜にずらして、二日と半日のささやかな休暇である。

「宿の混雑、道の渋滞も回避できる」とは奈津子の提案で、誠二は別の思惑で休暇を切らした。乗った。とは奈津子の提案で、誠二はカーテンを閉め切った奈津子の前に一台のセダンが止まった。運転席を降りたのはすっかり釣り仕度に固まった誠二、奈津子に「は

やく着替えて、すぐにも出発」と催促する。

釣り道具を後部席に満載して、玄関前を出発したのは七時半を回った。息子の翔はその春、県立高校の一年になった。この年頃の男子は両親との外出を「うっとおしい」と避ける。今回も休暇ずらしを決める前から同行を嫌がっていた。

翔の断りを見越して、自ら室から出てこないとなると、奈津子はしかししいざ翔が見送りに自室から出てこないとなると、奈津子は寂しさを感じた。出立に翔の横顔に一瞥できなかった翳りと膝を抜けたなま暖かい風が思い出させた「ヨッチャン」を余計に気にしてしまい、助手席でこの旅は不吉と思ひこんだ。

押し黙ってその浮かぬ心を誠二に隠した。

連休中の交通混雑はさっぱりと消えた。人気の消えた街角を一気に抜いて、五十号に入った。流れは順調だが誠二は不機嫌だった。口を開いたのは厳しい叱責だった、

「あいつ何考えているのだ、顔もださずに」

「すぐに中間試験が始まるから復習したいって。帰ってからちゃんと言いつくろう。車内では誠二を立てた。」

奈津子に翔の先々の不安は残る。誠二と翔はいずれ生活を共にしない。東京の高校に行きたいと希望があつたが奈津子は必死に説得して地元高校に進級する合意を得た。家族共に暮らすのは卒業までの三年間だろう。

その三年の間誠二を立てるのであれば翔の反発を抑えるしかない。二人に諍いがあれば、奈津子は翔に「誠二さんはあなたの父、折れて」と言うしかない。その場が治まっても翔は誠二をかみならず見限るから、あからさまに誠二にたてば、息子の翔が奈津子から離れる。翔を失う生活はいつか訪れる。奈津子はその日には「ヨッチャン」も見失う。

誠二と翔が相似る理屈はないし、二人もその経緯は知っている。しかし成長を重ねるにつれ、翔がヨッチャンに似てきたのは奈津子には驚くほどだった。時たま見せる横顔、口を結び足下に目を落とす仕草、不機嫌と見える黙りこくりに、奈津子のはつと息を呑む瞬間である。まさに目の前の翔に「ヨッチャン」が舞い降りたと信じてしまうからだ。

翔がヨッチャンに似るのは理屈としても、それほどまでに相似してゆくのを奈津子は怖れる。

「もしも二人が出会ったら、すぐに分かかってしまふ仕組などはあり得ないか
予期しない邂逅は喜劇で幸福を引き込む仕組などはあり得ないか

ら、出会ったなら二人は不幸になる。翔の横顔を見るとうれいけれど、哀しくなるのはあからさまな相似に氣を揉むからだ。奈津子は彼の愛称のヨッチャンも、まして正しい姓名も翔に告げていない。

誠二自慢のセダンは昨月に購入した新車、エンジンは余裕を残してなお軽やかに音を立てる。車列に潜り込み追い立てられれば追いつて立てる。運転を楽しむうちに誠に機嫌が戻った。

追い越して先頭を抜ける軽業運転を奈津子に披露し、久しぶりの遠出を自慢げに走った。助手席の奈津子はそのうっかり寝てしまった。働き通し、身体の疲れと心の緩みに魔が差した。運転する誠二にも疲れは同じで、前方を見る目の膜が時折曇る。

岩舟を過ぎ一気に広がる道幅が小山のバイパス。黄色の回転域を難なく越えてさらに伸びるが、はやるエンジンを誠二はブレキー踏みで諫めた。制限速度に落とされたのは安全運転を心がけたのではない、路肩に潜む「覆面カー」への用心である。バイパスでは覆面に用心、地元ナンバ―は戒めを忘れはしない。

「紺のセダンが危ない。思いこむのはなお危ない。軽トラックの荷台にヤグラを組んでパトランプを回していた」先月の初乗りを思い返した。

思川を越すころに八時をまわった。予定通り、めざす大新井には二時間もかからない。結木をすぎた川島に向かう緩い左カーブ。疲労の為に集中できなかつた誠二のうっかり加速が原因か、助手席でスピード管理する口うるさい奈津子のうたた寝が原因か。対向の大型トラックの車線飛び出しが直接の原因である。

双方八十キロを超えての正面衝突となった。

トラック運転手は腕にかすり傷だけ、通報義務を忘れ運転席からとび出して逃げ出した。セダンからは誰も出なかつた。前部は運転席と助手席のボンネットがトラックの鼻に押し潰され、ガラスは破片と飛び散った。ハンドルの胸と腹を押しつぶされ、ガラス片を全身に浴びた樋田誠二は即死。助手席の奈津子はかろうじて息が残るが、絶える寸前。窓枠を破断するまで席から抜けず、救命措置を受けられなかつた。窓枠を破断するまで席から抜けず、救命措置を受けられなかつた。

抜き出されたその時に息が絶えた。

路肩に寝かされ、意識のさまよいに生が果てる最期の刹那、奈津子はか細くもやつの力である言葉を漏らした。

「シヨウに伝えて、マツ：ヨ：ヨ：ヨ：」

救急隊員が奈津子の虫の息を聞き取らなかつた。蚊の唸りに劣る声の震えだつたので、最後のヨ：は聞き取れなかつた。駆けつけた子の名がシヨウ翔と確認して、奈津子の言葉を伝えた。

「最期は、マツヨでした」
 隊員はマツヨの有音節に混ざった無音二節を切り捨てたし、もと
 とは「あの世で息子を待つ」と隊員は理解したので、その意味にあ
 わせようとして、有音節だけの一言に再現したのだ。
 母の死に直面して嗚咽を隠す余裕など持たず、遺骸を前に翔は男
 泣きに乱れた。誠二の遺骸は見せられなかった。「身内ならシート開
 けるが見るか」の捜査官の質問にすぐに「否」と答えた。
 誠二の最期を見届ける思いやりは翔にはなかった。手帳にしつか
 りと「マツヨ」と書き止め、隊員には丁寧な礼を述べた。

母奈津子はその名をいずれはうち明けるはずと翔は願っていたし、
 今際にとある言葉が発せられたからには、自分に向けられたのはそ
 の名だと翔は受けとめた。たしかに「マツヨ」は彼へのメッセ
 ージだったのが、隠れされた抜けの音に気を回す手だてを翔は持たな
 いし、誤りをただせなかった。

あえて奈津子が「マツヨ」と無音節を発しなかったとの解釈
 も自然だ。見合えば互いの因果に気付いて無言で怯えるだろう。そ
 れほどに相似して、姓名が因縁を裏付けしたらもう逃げはない。
 翔はすでに一五歳、初めて会った誰かが父だなんて、遅すぎるし
 惨めすぎる。そんな邂逅は不幸と氣を揉んだ奈津子は、それでも息
 子に義理を立てるため、半分だけ発声し残りを黙った、このように
 も解釈できる。奈津子も最期の見切りに逡巡したのかも知れない。

その夜、病院の霊安室の前で一人過ごした。母との別れは不幸が
 連なる道筋がやつと閉じた結末に、幸運一つだけが残された樋田
 翔は思い直した。「マツヨ」を知ったからである。

「誠二が父でなければ誰が父かの答えが全くない。それでは死ぬま
 で父親のない子だ。マツヨになる男がたとえ悪人でも、それが父
 と心に持てば、己の由来に悩む瞬間はもうない」

その者はどこかに息を潜めている、そう思えばそれで完結する。
 彼を探す必要はない。出会ったとして父に何を語るのか、母の最後
 を伝えるのか、語る何も思い浮かばない。とある実在としての父が
 いると知ったのだからそれでよい。人生の節目が越えられたと安心
 した。

樋田翔はその時高校一年の五月、養父方の樋田家は県の北方、山
 間地にやせた田畑を耕作する専業農家で、平素から交流は淡い。誠
 二の父が「残された畑を耕す専業農家」を要求してきた。子供が
 いれば相続はその父、伯父など上流には還元しない。これが権利だ

が、翔の祖父は「お前は誠二の実子ではない」をついた。養子にも相続権は発生する。翔は自分の権利を主張し土地家屋、保険金も一人で取り、誠二の係累との樋田との交流を一切断った。そもそも相続する土地と家屋は結婚する以前に奈津子が購入し所有していた。自身の権利を正しく主張したただけである。

奈津子のすぐ上の兄、翔の伯父木暮源治は地元高校を卒業して東京で下宿しながら二の専門学校に学んだ。一つは料理学校、もう一つは語学学校の夜間の講義。源治はホテルの料理長になる夢を抱いていたので、将来にフランス語は欠かせない。シェフの夢は叶わなかったが、妻となる大野民子とフランス語講義で巡り会い、縁があつたのだろう、結婚した。民子の実家は源治も落ち着くことになる多摩の小さな街、北山台にある。岳父の太助は花木仲買を地味に営んでいた。シェフになるまで修行は長い。その長さと不安定さに源治は人生設計を引き直した。片方ながらも一旦は料理に突っ込んだその足を引き抜いて洗い、民子の懇願を受け入れて太助の元で花木の修行をはじめ、花木商いに身を落ち着けた。その頃から源治の実家、多々良百津で電照菊の栽培を始めた。兄の農協への顔聞きを利用して、岳父の商いのコネも盗んで、大勝負のとある博打で機会を見極めて、シテ相場の狙いが当たった。業務を広げる資金を獲得した。駅前前の整形地を民子の手引きで購入出来たが、時期がバブルの直前。この土地バブルも泳ぎきった。

源治は翔の「命の恩人」を自称している。正しくは「生まれ出でさせた恩人」、両親の事故で一人となった翔をことのほか気にかけて、北山台の近在に転居せよとしきりに勧めた。所有する駅前マンションで「近々引っ越しが出る、お前に手頃な小さな部屋が空く。部屋代はいらない」との誘いも幾度かかけた。しかし翔はサノウを離れなかつた。高校の三年間を一人で生活した。閉鎖した美容室には母の思い出が残っていたのだ。母が専用に使ったカット椅子に腰掛けて書を読み、鏡台を見ては文を書き、ドライヤーお釜をポストイトのメモ貼りに重用し、フロアに立っては竹刀の打ち込みに汗を流した。三年間の一人生活を経て東京の大学を希望し入学した。「東京の大学」としたが多摩にキャンパスを持つので多摩の大学である。

翔は大学生活を通じて、キャンパスに近接するアパート一室に住

む事になつたが、そこは源治が居住する丘陵の住宅地にも、花店の北山台駅にも近い。源治はその宅地名が駅名の由来となつてゐる丘陵地に住む。名の通り、北側に小高い丘が連なり、尾根からは幾筋かの枯れ谷が、西南の低地方に向かつて斜面を削る。尾根に続く孤立した一角の二筆を木暮源治が購入し、居宅を建設したのはバブルが終焉して五年後、二十世紀の最終年だった。緑に囲まれる白い壁の二階家、木暮源治の居宅は森にひっそりとたたずむ。石積み斜面が道路からの視線を隔てるので、居宅の様は外から見えない。芝生庭の奥が尾根筋からの斜面で、削られずに残った谷戸の側面である。芦と茨と雑木、篠竹とアカシアが鬱そうと繁る深い谷斜面が庭の脇に立ちはだかる。

一 仔羊のロティとカオール

季節は新緑、源治宅は枝葉の萌え立ちに囲まれた。遅い午後の陽光を受けた若葉が照り返しをまき散らし、白い壁がうすい緑にきらめいた。中庭に若い女の弾む声が渡った。声の主はサキ、木暮源治の一人娘である。シェフ帽と白のシェフ服、緋色の前垂れに紺の調理パンタロンで決めてゐる。襟も袖口も角のそろつた下ろしたて。サキには大きめなのが欠点だが、二重に袖を折り重ねれば女の細腕にもそろふ。芝生中央で立ち働くサキの前には、赤煉瓦を積みあげた炉が組み上がつてゐた。今夜のメインとなる仔羊肋肉を直火で炙る特設の炉である。肋肉は二塊、焼き串に十字に刺されて、炉口で火当たりの順を儀よく黙って待っていた。サキが炭の熾りに手をかざした。火当ては三秒、その加減は熱ければ炙りに頃合い。ぬるければ炭を煽る。至つて簡単だ。十字の串を炉縁に当てれば程を置かず、滴る脂が火に落ち青い煙が盛り上がる。火加減見ながら動き回るサキは手練れシェフとも見間違ふ付くのは白衣で、身体の線は実に細い。十九歳を迎えたばかりの少女を、大鍋抱える太っ腹のシェフと比べるのは無理だ。肉の堅さ柔らかさを箸先で押しは確かめる。焼き串を手にとつてはもったいぶつて、前に後ろにと移動して、火当たり具合を調整してゐる。炎はくゆり上りと肋から脂をしたたらせる。サキは小鼻をふくら

ませてはこもる匂いを吸い込んで、炙り塩梅を吟味し、頸を傾げてまた頷いた。

「煙の立ちに目がしみ、ぱちくり繰り返す若者に講釈を垂れた。」「コツは火加減をしつかり一定にする。もちろん炎の立ち加減に合った肉の高さに気を回し、肋肉の座標と熱のベクトルを最適化する。焼すぎは駄目、コゲの跡が一ミリでも見つかつたら失敗。焼き足りないはもっと駄目。羊を生で食べたいのは森の狼、まともな人ほど生で食べない」

「サキは炙り肉の焼き加減を人生教訓まで含めて垂れた。」「焼きすぎも足りないも悪いは分かつた、どう焼いたら良くなるのだ」

樋田翔である。翔とサキはいとこ同士となるが、血縁のつながりはない。

「それは良い質問。」

じんわりと焼上げるのよ、表面はクリスピーで肉は脂を内に秘めてジュウシイ。手間かけた肋肉は火から下ろされると、解放せよと怒る。肉の怒りにおびえて解放すると、焼いた香りが水蒸気に掠われて吹き上がる。解放はしばらくお預け、ホイルにしっかりとくるむ。三十分を待って、肋にそってカービングを入れると、肉の色はピンク。湯気はジワツと、我慢を重ねた肉の怒りは静かに解放される。

脂身とろけた肉身の色合いの頂点、そこに至高の一塊が残る。落ちる脂が皆落ちて、残る脂はがんばって：「

炙りの講釈にうんざりした翔、火搔き棒で炭を突いた。火柱がたつて肋肉をジュウと言わせた。

「アラー、翔つたら。かき混ぜては駄目。やっとまともな火加減になったのに。これ以上の強火は肉面にコゲの屈辱黒烙印を張り付かせるだけ」サキは口を尖らせた。

「ご免、火力が弱すぎるかと間違えた」

「乙女のため息だって恥じる弱い火でじっくり燻る。これが炙り肉の秘伝」講釈はさらに続く。父親、木暮源治の直伝の受け売りである。

「グオーン」

軒下からチャビの吠えが聞こえた。火口を暴れる炎を嫌って裏に待避したが、脂の煙が彼を追いかけた。脂が焦げる匂いが気になつて中庭に戻りたいが火はなお怖い。犬走りに止まるしかない。ジレシマに悩む犬の一吠えだった。

吠えてすぐに引つ込んで、鼻面だけ脇から出して庭の様子を探る。

チャビは体高五十センチを越す紀州犬が混じる牡の成犬である。料理の出来具合は犬なりに気になるのだが、それ以上の気がかりが

見知らぬ男、先ほどから「シヨウ」と呼ばれている者が主人サキ様に
 見せるなれなれしい態度だ。
 サキ様の脇に寄りついて親しげにやつく顔が気に入らない。その
 のうえ二人の距離が短すぎるのはもつと気にいらぬ。男の手先が
 微妙にサキの指に触れるのはもつとほか、サキ様だってその手に
 触られ、はしゃいでいるが、これもチャビは許せない。
 犬ならではの観察能力の鋭さをひけらかして、二人の間をうかが
 う。隙を見て鼻面を入り込ませて、いみ鼻と唸りの地声でシヨウ
 をやつかい払いしたいけれど、チヨロ炎が怖いから近づけない。
 「グオーン」とジレンマ啼きをもう一度庭に向けた。

「チャビはね、何を焼いているか知っているのよ」

「豚でも鶏でもない羊だと知っているのよ」
 「肋だつて知っている。そして食べ残しはチャビの取り分だと騒ぐ
 のよ。残りの肋骨をバキバキと咬み砕いてしまふ。骨の焼き塩梅は
 レアーに限る。噛みつくにはレアー骨髄が一番だよ、加減見て焼い
 てと見張っている。」

ほうら、あそこから、あの真剣な犬顔を見て

サキはトングでチャビを指して笑つた。犬走りからレンガ台周囲
 を伺うチャビの犬顔は、真剣でありそれ以上に空腹面だつた。点の
 目と鼻先で煙の流れを追つていた。

窓がガラリと開き、洪い声が庭に届いた

「翔、こちらにこないか」

「お父さん、あなたと話したいって言っていた、つきあつてあげ
 て」

促されて翔は洪々居間に戻つた。

翔の大学生活は四年目を迎えた。源治の花店には週に二度、午後
 にアルバイトに出向くが、源治は仕入れと配達で外出している。ま
 れに店内に居るときには世間話で声をかけられるが、何かと手元の
 作業に集中して源治との対面は避ける。源治は何かと気遣いを示す
 が、彼のこまめさが翔には重荷になる。

対等を心がければ、毛嫌いされないだろうと源治は努めるのだが、
 いったん対話が始まると、中身の多様さと意表つく落としどころに
 圧倒される。歳だけではない、経験の差が話の進みを一方向にして
 しまふ。翔は学生、二十二歳。源治、二回の人生勝負で北山台に居
 を築いた五十五歳。

大学生活は三年余を過ぎても、翔が源治の私宅を訪れたのはこれ
 が初めてである。幾度も夕食の誘いがあつたが、論文の締め切りな

ど理由をこじつけては訪問を断った。その度に源治は恨みがましい皺を額に寄せる。今度は招待の名目には、「サキの入学祝い、翔の就職活動の景気づけ」とした。翔は断れなかった。懐の深いソファに座る源治は、翔を前にしてゆったりと上機嫌だった。大学の話題から自然に花に移った。機嫌が良い時には彼はラを語る。翔を前にしてその花を選んだ。

「周囲に枝をめぐらせ四方を見下ろす傲慢な立ち姿。すらりと背丈が伸びればそこらの屋根をはるかにしのぐ。遅い春、強い日差し、蒸せる風、空の青さの一角が白に隠された。彼女が肌をそっと脱いだ。あたりに漂うかぐわしさ、風すら恥ずかしさに吹き留まる。リは白い乙女だ。フローラの王女だ。

それを較べたらバラなどは、いけず俗人の歪んだ欲望の僕だ、媚びを売り色で騙す。そこいらの花魁人形と同じだ」

バラの悪口が最後に出たが、彼女等に落ち度はない。罵りの口を機嫌なのだが、不機嫌の種が話し振りの裏に残り、それに気付いたからだ。

源治は翔の前に見ているので上機嫌、しかし三年目にして初めて訪問だったと気付いて、他人行儀に不満が湧いたからバラに難癖つけた。

心情の移ろいを花の種類にたどれる。源治にだけみられる風変わりな特性である。歳とともに頻繁に特性が顔を出すので、民子にもサキにもとづくに見破られていく。

ネル布をたててカトラリを磨いていた民子は、話題がバラ移ったのを聞いて台所の隅で舌をべろりと出した。出番は近いと。

アミューズとは食事の先駆け、お口に楽しみの一かつまみ。民子が大皿の上に小さな塊に盛って運んだ。台所には戻らず、源治の前に座ってバラへの理不尽な言いがかりに口をはさんだ。

「お店はバラで稼いでいるのですけど」

不満に口を挟めば悪口はなお続く。民子としてはさらりと諭したが、それはバラに向けた源治精神の不平ベクトルを知っての上、単純な構造頭の源治を焚きつけているのだ。言い終わってまた舌を出した。

「反バラの論調を崩さず源治は、

「バラの稼ぎは日銭に消える。お粥すすって水すくって終わリだ。稼ぎは日銭、宵越しできない払い捨て、女郎の稼ぎか左官の手間か」

「バラと女郎と左官の三角関係なんて初めて聞いた。稼ぎはお粥の

糊に水すくいですって。カオールとかこのフォワグラはどこから出るの。炭酸水だからってバドワのラベルが張ってあれば、それでなお高い」

「赤いバラが好き、ピンクバラが欲しい、黄色バラを二十、いや五十本だと奇特定の客が幸いにも北山台に多いから、粥を口で糊にする、そんな貧困癖を夕に晩に繰り返せば、花屋の主人が何とか生きて行ける。」

バラをいくら売っても家は建たない、土地は買えない。土地を買えたのは菊。家もビルもカオールもバドワも菊が運んできた」

カオールはボルドーの南方のワイン産地、黒ワインと称されるが飲み口はボルドーよりも軽い。バドワとは軽く発泡を見せるミネラル水で、二品とも源治の好みである。

「菊はリラの次ぎ、そう言いたいのかしら」

「その通り」

形勢が悪くなったので、無難な菊に話題を移した源治。菊はバラとリラの中間に位置する。彼も中くらいの機嫌に戻った。

民子が狙った「源治のバラ炙り」はとっさの菊機転でかわされたうえ、源治生焼けでの逃亡を許してしまった。

冷えた食前酒、キールで喉を潤すと、源治は再び上機嫌に戻った。「この地では誰も知らないからリラは売れない、リラは一銭も稼いでいない。一粒の飯、一杓の酒も花屋主人に与えない。それで良い。」

リラは王女だから。臣民に恵みを施さない」

リラ女王にもどいたら民子について行けない、台所に戻った。

北海道や高山冷地ならいざ知らず、本州の平地でリラは育たない。リラが死ぬのはいつも夏の夜。盛夏、南の低湿地から吹き上がる対流風の潜熱に多摩の地が苦しみ、リラは身もだえる。

談義も続く。

「冷たい夜は訪れない。熱い夜風、人は寝るに苦しむがしのげる。リラはいらだつ」

翔は手につまむ細グラスの底から、絶え間なく湧き上る泡を見ていた。

キールとは黒スグリを白ワインで割る甘口の食前酒である。シャパンで割るとロワイヤル、すなわち「王の」の接尾詞が付きその昔は王様が飲んでいた。諸臣庶衆、農民などの口になじむキールとは全く別種の味である。

手に持つキールからは泡がフツと湧くのなら、それはロワイヤルである。ロイヤルを嗜んでも翔の手持ちぶさたには変わりがない、グラスを一気に干しても源治の弁は終わりを見せない。しかし王女は風を裁「非礼を犯した熱風は王女の前に許しを乞う。しかし王女は風を裁

いた。冷たさが我が命、汝は追放じゃ、冷たい褥の抱擁だけがワラワ、リラ王女を安堵させる」

これが結論、やっとたどり着いた。源治もキールロワイヤルを一緒に飲み干した。

「ご苦労様」と翔は小さく拍手を入れた。「冷たい褥の抱擁が……使いようのない知識が一つだけふえた。」

「おい民子、もうーグラス、いや、翔の分入れて二杯キールをつくってくれ。ドライに、喉が痺れるくらい冷たくドライにしてくれ」

白の上着に紺の前垂れ、サキがシェフ姿を居間に見せた。大きな皿を抱えている。焼き上げたばかりの肋骨は薄箔のフォイルにくるまれていて。肉の焼けるかぐわしい匂いが、フォイルからも発散している。大皿をテーブルに置いて

「今日はとっても上手く焼けた」と自信のほどをあからさまにした。熾火にすっかりあてられて、サキの頬が赤く火照っている。頬まで火照らせた火加減ならば、肋骨はさぞかし美味な焼きあがり待ち遠しい。キールロワイヤルを片手に源治は立ち上がり、テーブルに近寄った。今にもその焼き上がりを目にした鼻で確かめたいと

の不屈きな仕草、湯気を上げているフォイルに手をかけた。

源治のその手をサキが抑えた。

「開けては駄目よ、三十分は安静に。肉身の怒りを抑えても、味の無断脱走を許可してならぬと何度も言ったじゃない」

「一本取られた。焼き上げて三十分、チャビが吠えてもフォイル開けるな」

「グウォーン」庭からチャビが吠えた。

サキは自室に着替えに入り、三十分の後戻った。円卓の配席は源治が奥の左その隣席にサキ、サキの前席に翔、翔の隣が民子だ。

「今日はシェフ、サキの渾身の手料理だ」

「シェフは男性形よ、シェフエスと呼んで」

シェフの発音は舌を垂直に起立させ、上口蓋と接触させる。舌のわずかな隙間から抜ける摩擦がシェと震える。日本語の「し」に比べると隙間風のように硬い。サキは「シェ」を北方フランス声で正しく発音した。

「シェフに女性形があるなんて知らなかった。私が料理を修業していた時は、調理は肉体労働だから男の領分だった」

「今や料理は男女は同権同機会、著名なシェフエスは幾人も数えられるのよ」

女性雑誌の知識を披露したのは民子。

分が悪くなった源治に翔が助けを出した。

「昔も料理は男女同権でした」まさに同感と持ち上げて続く言い分は「それを越して女性優位だったとも言われていた、食べる量としての権利です」

「さすがは翔、明言だ。風を語るかのように宇宙真理を讃えるわい。シャフェスが輩出する今世紀になって、女権の証の食欲は、その増大の威勢とどまらず、食い物世間は大食らい女と太っ腹シェフェスに席巻される。ワッハッハ」

源治の皮肉に反論したいはやまやまだが、サキと民子は何よりもあきれ果てて口を閉じた。女性料理長はテレビなどでも活躍しているから、そのうちに席巻されるのは皮肉にもならない。世相知らずで、世のうっとり人の機微に無知と聞こえるので反論のしようがない。腹を揺すって大笑いする源治の屈託のなさにつられて三人も笑った。

口開けのアミューズはパテ、肝臓の裏ごしだった。その後には前菜オードブルに無難にソーマンが引き継ぐだろう。メニューの常だが、源治式の夕餉では前菜は余分と引き抜く。「プラギャルニ」すなわち主菜に挑む。

それは締めくくりにチーズを楽しみたい、濃厚なエベック橋をカオールのご相伴で食べたい。チーズを食す為にはオードブルは邪魔と抜く。

源治原理主義はもっともらしい言い訳を用意する。

「健啖家といえども、日本人は彼等流儀のフルコースは食べきれない」と。食欲での男女同権者の大食らいとしても、フルコースは多すぎるとも加えた。

サキが神妙にフォイルを外した。皆の目そして鼻先が筋肉に向いた。

熾り火に炙りの火炎を絡ませる、直火かざしの塩梅が成功した。気になる焦げは見えないし、焼け肌は肉汁に脂を混ぜてフツと沸きたつ。余分な脂は垂れ落ちて、残る脂はとどまって肉身に柔らかさを還流させている。食卓に湯気が立ち上がり、仔羊の甘い香りがテーブルに漂う。

調理の締めくくりとは筋肉をカービングで分け開く。サキはその役を父、源治に譲りたかった。しかし源治はカービングを入れるのは「シェフェス」の役だと断り、開栓したばかりのカーブを一言含みして「少しタンニンが、でもなかなか」と喋りすぎた喉を潤した。

覚悟を決めてサキが筋肉にナイフを入れた。慈しみの焼け肌に最後の情け、肉をえぐり骨を断つ切りこみをカービングが与えた。

刃先は肌に吸い込まれ肉を開いた。肉汁は刃先に滴り皿に伝わり、

流れる汁のその色はピンクだった。仔羊の上機嫌なピンク色の笑いが刃先にこぼれた。「アンローズになつて、美味しそうに焼きあがつた」
 「アンローズとはバラ色の焼け具合との意味で、美味そうに仕上がった鴨と羊のみに使う。
 食卓にそろうそれぞれの前に、タイムと黒胡椒とラム肉の甘い香りが湯気に立ち、腹の底から食欲をくすぐった。源治は手元グラスに注がれたカオールを飲み干した。こちらも開栓から三十分
 「飲みやすくなつた」

源治宅の夕食風景から一旦離れて、源治が翔の「生まれる恩人」になるまでを語る。
 帝都線北山台は各駅電車のみが停車する小さな駅である。線路をまたぐ連絡橋も二階に登る階段も持たない、改札とホームと駅前広場が同じ水準に並び、その面に電車が止まる。平坦な構造だけに便利である。
 改札をでると駅前広場が控える。ロータリー広場の中央には花壇が冊に囲まれて、花壇のチューリップやコスモスが、降り立つ者を出迎える。
 広場から連絡舗道が一枝伸びて北街道につながる。街道と交わる角、駅からは至近のうえ街道に面する商いの一等地、その角を北山台花店が占める。
 駅は小さいが、朝夕の人の流れは舗道にあふれる。午を過ぎてからは街道の交通が賑やかとなる。
 見送る者迎える家族、花壇を前に語らう恋人、空を見上げ広場を歩む学生達が花店に立ち寄る。街道を流す運転者はブレーキを踏み、花の飾れるウインドウに見とれる。
 花店に足を止める客は花を愛し、花を求める。生きるために皆が花を求める。生き様の苦しみ、悔やみを美しい花で彩りたいと花を求める。
 菊だけ質素な花束で、菊にこもった追憶の悲しみが眠りよ永久なれと死者を慰める。
 人の動線の車の活動の融和点という好条件をほしいままに、立地は花木商いを繁盛に結びつけた。

駅を取り巻く一帯の土地は地元の大野流が多くを所有している。源治の土地は商いの条件が全てそろう最高の一角で、本来は大野本家の所有する土地を所有するに至り、マンションを建て外装を純白

の光沢タイルにきめた。平屋の地元商店をしかと睥睨する高さだ。一階を花店にぶち抜き、二階から最上階までを貸しマンションとして常に見守られている。白い外壁の効果は駅三分の近さと重なり、学生、通勤者でマンシオンと花店の繁盛を妬む地元の者は源治をけなす。「本家の金城湯池だった一等地を転がしただけだ。奴には貸したはずだったが盗まれて四倍の金に化した、ぼんくら跡取りを踏み台にした」いらつく口調で源治を罵った。生涯の大バクチ二回を勝ち抜いて閉じたからこそ、土地もマンションも手に入れたので、民子の実家からは一切援助はうけていないと源治は反論する。「よそ者」の源治がその優良土地を取得できたのは民子との結婚に端を発する。民子は大野傍流の出である。勝ちで揚がった二度の大バクチとは。

夏の初めに五号台風が半島を襲った。半島全域に電力を供給していた変電所が水没し送電網は至る所で破断された。夜に電照を与えなければ菊のつぼみどもはヘソを曲げる。開花の時期を彼岸に合わせてくれない。つぼみの菊を買う者はいない。彼岸の七日前、菊が花市場に行き渡らない。品薄で仲買価格が高騰した。そして秋風が彼岸の接近を教えた。相場は異常な高値を記録している。菊の日照りに霊園が渴きだした。相場は異常な高値を得ない。愛玩の花は高ければ買わない。それがなければ諦めがつく。菊はバラと全く異なる事情に堪えている。好き嫌いに関わらずその花を求め、季節は必ず戻る。死の季節、地に臥せる亡者が立ち上がり菊の慰めを求め、それが秋の彼岸、菊の季節と言われる由来である。菊がなければ亡者は生きられない。死んだから亡者なので死にきれないと言い換えれば正しい。天井が見えない菊相場は仲買、投機商社の注目となった。しかし彼らが見えない菊相場の仲買、投機商社の注目も、現物はどこに生えてない。半島ではつぼみ達、栽培ハウスの暗いビニール天井を見上げて、不吉な季節だと開花に反抗している。電照は変電所で足止めくって未だに届かない。

五号台風が去ったすぐ後、彼岸の菊の高騰を見越した者が一人いた。木暮源治である。実家では長兄が近在の農家と共に電照菊の栽培に資金を投資し、生産を軌道にのせていた。市場では新参の弱み、希アツミ物に敵わず東京の花市場持ち込んで足下を見透かされ、希

望する売価と折り合わなかった。台風が去ったのが八月の初め。源治はテレビで半島の惨状を確認したあと、すぐに多々良百津に乗り込み、実兄の肝いりで農協の幹部を抱き込み、近辺の栽培菊を先物の「切り払い」で買い占めた。「バンドウ菊」とブランド名まで付けた。買い占めの資金は源治の貯金を全て崩したが、とても足りない。岳父の世話で地元銀行、それと木暮実家からの借り入れを加えて、億が一指を折れるまでにやっと届いた。

彼岸が東京にやってきた。菊は高値に張り付いた。

多摩には霊園が多い。霊園に囲む登りの街道には花店が軒を並べる。店先に菊を置かない花店に客は止まらない。菊は日照り、花枯れに渴く店が軒を並べた。菊なしウインドウは虚ろな造花空間に化した。

参拝の列は菊を探して街道を夏の蛇のようにさまよった。カーネーションは亡者を慰めない。バラを捧げたら死者が怒る。約束の花、黄色い菊を捧げない墓参りは、亡者の群れを錯乱に陥れる。黒衣の未亡人は花を置けない花台に悲しみ、墓石の陰でしゃくり上げた。彼女の涙が五号台風の真の惨劇であった。

菊飢饉の最中、人目をはばかりながら花店を一軒ずつ、一台の軽トラック静かに訪れていた。運転席には浅黒い顔の若者、助手席には連れ合いらしい色白の女。三十年前の木暮源治と妻民子である。霊園の門前、構えの大きな花店の前に軽トラックが停車した。源治は主人に幌を上げ、荷台に積み込まれている商品を見せた。それは別世界、天国であった。荷台に創造されている天国に店主が見とれた。菊に菊が重なり花弁と花茎がまばゆく混じる。天の光とあの世の輝き、それを目のあたりにして目はつぶれ、まばゆさに打たれ身は崩れ、膝胸に手を合わせた。地上に禁じられた花、今は天国にしか生えない菊達の誇らしげな姿態を目の前に見たのだ。「いやさかー」は花屋の恍惚脳が軽トラ荷台に捧げた祈り文句だった。興奮をかかさず、花屋は若者の胸元を掴んだ。「怒りの死者が慰められる、飢餓の亡者が救われる。生者の怖れは消える。」

彼岸戻りの亡者共がこの世に居残り、街角を怒りながらさまようゾンビ悲劇を、この菊天国が救済する。

霊前にうつつの黄色の大振り、背の高い年増女の品の良さ、すらりの茎は天をめざす。ヒネ亡者好みのねっとり八重も、新柱

が好む清楚な一重も、花卉を思いっきり盛り盛りに開いて、芸達者の菊
 達皆が花店主人にむかって、お揃いでウインクを眩しく投げた。
 「恍惚に囚われて口をあけたままでただ眺める主人の耳に源治は
 「市場相場に手間賃プラスで欲しいだけ出荷できると」囁いた。
 源治が買い占めたのは「バンドウ菊」の百万束、日中は売り込み、
 夜には実家に集荷でトンボ往復。軽トラック一台、身は源治と民子
 二つ、彼岸を挟む三週間、菊相場の急騰に四日もあけない強気で売
 り抜けた。元手を四倍に増やし、後の大張りの用意をかためた
 自由に行ける資金ができたので駅の広場に面した整形の土地を購
 入した。これが源治の第二のバクチの土地転がし「奴には貸しただ
 けだった」と後に妬まれる原因ともなった。
 「この地では一つ気で金を積み上げて土は買えない。売り手の
 「いわく」買い手の「思惑」の二つ揃って、三本手打ちで締める。
 土着者同士の昔ながらの習俗である。
 くだんの土地を処分したいと民子が聞きつけた。本家跡取りが先
 物相場で失敗、まとまった現金が今すぐ必要になった。不動産店を
 通して売りに出せば、高値で売れる。それは本家の「恥晒し」なの
 で、大野の流れに密かに売りたい、借金せぜに満額を現金で積み上
 げられる者に、これが売り手の「いわく」だった。
 大野流は本流も傍流も土地持ちの資産家であるが、まとまった額
 となるほどの流れも用立てできない。資産を抱え流動性の手持ちが
 ない。菊相場で金を掴んだともてはやされた源治に民子を通して買
 取話しが寄りついた。
 源治は手持ち資金を全てこの土地に注いだ。融資は一切無し、本
 家応接の座卓に軽トラック荷台から下ろした「座布団」を束と積ん
 で、この場で払うと原ナマを見せた。
 跡取りは座布団束の積み重なりに目が眩み、すんなり三本締めで
 売り買いは終わった。
 登記の名義変更は木暮源治にだけ、大野流の民子の取り分はなか
 った。源治夫婦の共有登記が大野本家の担保で売却の条件だったの
 で、登記書士は怪訝に感じた。
 源治が跡取りの裏首を搔いたのだが、それを本家に伝えるのはお
 節介と書士は口を閉じた。
 駅に面した整形平坦地、抵当の染み一つつかないまっさら登記。
 勝負はすぐにやってくる。土地バブルが到来した。都心の大手企
 業が源治に買値の二倍を告げた。源治の首は縦に振らない。四倍に
 なって顔を渋々につくって同意した。契約日は平成二年二月二十七
 日、この日がまさにつくじめ。翌月にバブルが崩壊し土地の値が真っ
 逆様に転がり落ちた。

最高値バブルの頂点で売り抜けたのだ。五年たって、くたばり土地値も底にへばったと見極め、花商売には条件の良い角地を買った。登記の書き換え二筆で層倍の儲け、マンションを建てる資金まで残った。結婚はバクチと言われる。源治はこちらでは勝利できなかった。子が持てなかったのだ。養女サキは民子の遠縁にあたる。

菊を売りさばいていた九月の半ば。

集荷に多々良百津農協に戻った夜、菊の積み込み、伝票の確認処理が全て終わって、兄に挨拶をと実家に立ち寄った。立石の美容店で働く妹、奈津子が実家に戻っていた。

民子は長兄を前で置に伏せて泣いていた。長兄は「おろせ」と一言、あとは口を閉じ、奈津子から目をそむけた。やりとりを聞いて二人を見れば、妹奈津子に何が起きたかは分かる。民子を運転席に待たせ上がり込み、二人の間に割り込んだ。

「おろすは簡単だ、しかし一生後悔する。世間体を気にするの、育費をどう出すかと怖がるよりも生んだ方が後の人生は何倍も楽しい。

悔いも残らない」奈津子の立場を擁護した。正論である。生後一年の間は実家で親子を預かることも妥協した。

時折、源治が「翔の命の恩人」と自慢するのは、「生まれ出でた恩人」でこの経緯をなつかしがっているのだ。兄を諫めたのは、奈津子の子は養子にとの思惑が隠れていたからだ。子の翔を奈津子は頑なに譲り渡さなかった。

幼い翔にヨツチャンの別れ形見を見たのだ。

奈津子は男との出会いを長兄にも源治に語らなかつた。翔を産んでも、物心付いても一切語らなかつた。翔には「本当の父親の名前は、いづれ教える」と約束していた。

男との出会いは東京葛飾の立石。奈津子が働いていた美容店にパ

ーマ材料やシャンプーなどの資材を配送に来る若い男だった。お客の少ない午前中にバンで現れ、段ボールを開けて中身を棚に入れて。手際良い手つきと優しい表情なので、思い切って話しかけた。大学生の身でこの仕事を続けるのもあと半年、卒業する来年三月までのアルバイトと知った。落ち着いた話しぶりの若者。彼はきりり光る目つきであり、無精髭ともみあげをかまわずのばした優しい横顔を持ち、前から見るとすっかり結ぶ唇の印象が残った。年下などは気にならなかつた。

話しかけ応えてくれた、それだけの男だったが、言葉を交わしてからは朝に夕に彼を想い、思う度に胸がもだえた。若者に恋したの

だ。明日は非番の夕に「急用で実家に戻ります、帰りは明後日」と書き置いて、男と二人で四万温泉に旅に出た。翌月に妊娠が分かった。奈津子は男と別れ実家に戻った。翔を生んで一年の後、源治からまとまった資金を借りてサノウのアーケードで美容室を開いた。源治は、「これだけの金、返金は大変だが、身を粉にするつもりで返してくれ。なんなら翔を預かってもいいぞ、身軽になるから」嬰兒、翔は担保と仄めかした。

源治に翔を養子に取られる怖れも加増して奈津子は懸命に働いた。東京は下町立石の「流行髪型」を売り込む器用さが地方都市の若奥さんには鮮烈で、客が引き切り無しの繁盛を迎えた。

八年ほどは翔と親子二人で生活したが、独り身で寂しかったのだろう。二十後家は立つが、三十後家は立たないとされる。

ヨッチャンとは生き別れなので奈津子を「後家」とするのは無理があるが、そこをあえて曲げる。

翔を生んだ年が二十八歳だった、数えでは二十九、その年が別れとすれば、若後家は三十に一歳だけ足りないけれど、そこから立たずの伝えには逆らえず、理容師仲間の樋田誠二と結婚した。翔その時八歳。誠二が新しい父と言われても、前の父さえ知らない子は見知らぬ男には馴染めなかった。

店の名前を木暮から樋田美容店に切り替え、二人で切り盛りした。返済は滞らず金回りの心配はなく、夫も実直で奈津子はようやく安心できた。

奈津子の小さな幸せは長く続かなかった。その年の五月連休の月曜日、夫婦で夜のドライブで出発し、対向車線から飛び出したトラックと正面衝突、二人とも帰らなかった。この事故はすでに話した通りです。

翔が四年を過ごすことになるキャンパスは、源治の住む北山台に近い。入学式と諸手続、全て終わって源治の花店を訪ねた。源治は配達中、伯母の民子も店に見えない。奥に座る店番替わりの少女が奥の少女に目をながす。女学校の制服を着替えていないのは店の娘だろう、であればイトコのサキと推測はつく。

初めて会うイトコになんと声を掛けるのか分からず、視線を向けないフリを装って、横に目を流して姿ばかりを盗んだ。視線を向けない母が生前に「源治おじさんトコのサキはまだ幼いがきつとキレイになる」と口癖にしていた。高校に入った歳ならば、幼さは抜けてキレイに化けたかな、確かめてやろうとの魂胆はあった。

ガラスを通して見た少女は、確かに白い頬と細い顎で見てくれ良いが、赤い唇が妙に気になる。表情に幼さを残していたから少女そのままで、母が請け合った「キレイになる」との関連には思いはつかず、その時は「そんな物だ」と気落ちした。

制服少女はサキで、彼女は店先を往来する不審な目つきの学生が気になった。学生は店には入らず、盗み目つきをちらつかせている。詰め襟学生服と白線二本のトンがり帽、手に抱えるのは唐草模様の風呂敷の包み。北関東の赤土原野みたいな鄙びの様に驚いたのであった。

彼が「大学を受かったサノウの翔」とはすぐ分かった。レジを立ち、店前の学生に「シヨウさん」とサキが声かけた。二人のつきあいの始まりはサキの一声だった。

配達から源治が戻った。翔を見ると大喜びで店に迎え入れた。サキに紹介するわけではなく、早速住まいの世話を始めた。彼が所有するマンション、すなわち花店の階上になる「学生向きの一部屋」が四月には空くと入居を勧めた。「身内だから家賃は無くてもいい」とのいつも切り出す好条件をやはり持ち出して誘った。

源治はもっと良い条件でも、それがあれば提案したかったが、日銀貸し出しでゼロ金利を越える好条件がないのと同じ理屈で、ゼロ家賃に踏みとどまった。

翔は「地方出身は指定の下宿に入る厳しい学則があるから」誰も聞いたこともない規則を盾にして、源治のアパートは退けた。母の思い出の濃い影が残ったサノウの美容室から逃れたのに、伯父の世帯に戻るのがつらいと源治を避けた。

大学生生活が始まった。翔は授業が終わって源治の花店に立ち寄る機会が幾度かあって、源治から「週に一、二日、店の整頓と積み出しのアルバイト」の依頼が強く、こちらは引き受けた。店でサキと会う機会は増えた。

源治宅。翔、サキ、源治民子が困む仔羊炙り肉の美味しい食卓は、今主菜が閉じて締めくくりに入った。

締めくくりはチーズ、非加熱乳の銘品エベック橋が供された。パインにチーズを薄殻ごと塗り重ね、頬張る源治は話題を変えた。花でも木でも、左官の銭の遣いかたでも調理の秘訣でもない。今まで取り上げなかった話題に入った。

「大学に入ったとたん留学したいと言う。二年三年待てないかと尋ねると、今でなければ出られないと答えた。儂には判断が出来ない。」

翔はどう思うか」

「判断が翔にふられたが民子が横から口を差し入れた。あなたよ」

「民子はこの場で個人計画を露出した源治をたしなめていた。計画の主はサキである。」

「許可を受けていない留学を、その計画を知らない翔に父が語ってしまった。サキは素振りこそ見せないが困惑した。パンを切り分けるナイフを止め、翔の返事を聞きのがすまいと耳をたてた。」

「何の目的でどこに行くのかなどを知らなければ、何とも答えられない。それに私があればこれという立場には。」

「計画では出発は来月だ。最初はパリでその後南に移動すると言っている。」

「それにお前は木暮一族の一人で初めて大学に入学したしっかり者だから相談している。あれやこれやと助言する立場である。」

「サキとしては出発の日取りも何もかも全てが決まってから、自分の口で翔に伝えたかったのだ。翔は、サキの計画を予想してなかったし、突然それが来月の出発と聞けば、相当に進展している。そこまで進んでいたとは大驚きだった。」

「サキが留学したいのなら、サキの意思を確かめて源治と民子が相談して、承諾すればそれで決まりである。翔はイトコ、イトコはもう他人だから、他人の翔がサキの計画に口を挟むなどありえない。面くらいながら彼は源治に「他人」を崩さなかった。」

「翔がアルバイトで店に入り始めてからは、なにかと話しあう二人を源治は見ていた。その翔が「サキは他人」と突き放すはずがない、突然の難題にどう答えるのか。源治は彼を計ったのだ。」

「うろたえは露見されず翔は逃げた。源治の見込みは外れた。ただしその言い切り振りは詰まっていたから、混乱したと源治は読んだ。この場は逃げても、すぐにサキと話しを詰めると確信を得た。」

「もう一度話題を花木に変えた。」

「今月の末、北への旅行を計画している。商い開拓に幾つかの花木市場を見て回ろうと思っているのだが、翔に同行してもらいたい。」

「困惑が彼に一瞬だけ横切って、返事が出るまで沈黙が流れた。」

「伯父さん、ある会社のインターに応募している。もし受け入れられれば来週から始まり四週続く。可能とも無理とも今は言えないけれど、難しい。」

「次に「切符は予約を入れていない」を用意したのだが源治は続けられず、口閉じる機転も思いつかず、ぼかんと開けたままだ。目付き

の陰に落胆が被った。皿を下げていた民子が黙りこむ二人の間に入った。インターン活動を進めているなんて知らなかったわ。それだったらあなた、旅の目的を正しく伝えるほうが良いじゃない。翔さんにはその上で判断していただく場合もあるかも知れないから」

コツコツとせわしい打音が刻まれた、サキがテーブルをフォークの尻で叩いた。話がこじれていると伝えたのだ。テーブルを叩くなどは作法から外れている。食卓の礼儀にはうるさい源治でも、この時はサキをたしなめなかった。

源治は落ちこみから自分の立ち位置に戻ったのか、次に何を話すか判断できた。流れをかえる、それが選択だった。

「いや民子、いいのだよ。インターンとは会社であたかも社員になって働くのだろう、どんな会社だって駅前の美容店や花屋よりは大きい組織だ。人々が集まってどういう気構えで働くのか、その組織を知る事は大事だ。インターンが終わったら家に来てくれ、北の花木の土産話があるさ」

「その時は翔さんに、まとまった話が出るようよ」と民子が続けた。テーブルからの打音はいつの間にか止まった。サキは台所に戻っていた。

「まとまった話」が何を意味するのか、翔は思い当たる。小売りに特化している駅前花店の経営に他ならない。源治は花木の卸しに仕事を集中したい。卸しとは新しい花木の開発で、生産者との打ち合わせにより時間を取りたいのだ。

北を回る旅行も、北方の園芸家との打ち合わせになる。花店を任せると言っても「雇われの店長」では、学士資格を持つことになる翔に提案し難い。源治と民子は翔に示す条件を内輪で詰り重ねた。委託を超えた「委譲」が提案の核心となった。「跡取り」として経営の全般を与えるのだ。

ここまで翔にも推察が回る。しかしバラの品揃えで評判の高い繁盛店を、赤の他人に譲る道理はない。翔は甥だがそれは他人の始まり。では源治の養子になるのか、サキはどうなる。娘サキに財産を残すべきならば、唯の養子では進まない、すると翔は婿養子。サキは養女だから。サキと翔、二人はイトコでも、血のつながりはない。実のイトコの婚姻はあるし、戸籍イトコでも血はイトコでないなら夫婦になっても、世間になんの遠慮があるものか。

そこまで踏み込んだ話し合いだから源治が「北の土産話」としてのを、民子が「まとまった話」と改めたのだ。

そしてインターンが終わる週にはサキはもうフランスに出發して

いる。

主菜の皿が下げられ、デザートの段取りになった。源治の所望はいつも同じ、ラムシャーベットとデミタス、それがなかなか出てこない。シャーベットにどれほどラムをかけるのかをサキと民子で思案していた。民子は「そんなに掛けたらラムプールに漂う浮島シャーベット」を心配し、サキは「ラムが少ないとコーヒーにラムを混ぜてカフェロムだと言いつつ出すから、はじめから多く」と加減を思案していた。

台所の二人の会話は、庭に潜んで耳をたてる者に盗み聞きされていた。庭先から二度三度、小さく警鐘の吠えがたつた。注意を促すチャビの犬吠えである。彼として「ラムの振りかけ塩梅など些細すぎない、今のこの時、大事を忘れるなかれ」と訴えたのだ。

いつも通りのチャビの習性、これを知らない翔は

「誰かが訪ねて来たか」と源治に対応を促した。サキは台所から「あきれたわ、いつもこのタイミングにおねだり」とクスリと笑った。「防犯課長としての取り分を促しているだけだ。それにしても、儂らの食べ終わった頃合いがよくも分かるものだ」とは源治。

翔には理解できなかつた。ラムプールにシャーベット浮かせる贅沢な配分に落ち着いたデザートをサキが運び、チャビの吠えが説明された。

「食べ終わるとあの不満の啼きを立てる。最初は私たちも何のことか分からなかつた。放つていたらキャンキャンとうるさい。チャビは分け前を出してくれと騒いでいるよ」

分け前とは肋骨である。どんなに美味な羊でも人は肉身をもっぱら食らうから、肋骨にまで顎が回らない。犬の取り分が肋骨と端肉。嘗めて噛みしめてゴリと碎き喰うのはいつも犬。犬と人の太古からの共生で、野性を残すチャビにはこわい骨と固い髓が格別の楽しみである。

「どうやって肋骨をかみ砕くか、翔も見に来ない」翔とサキの二人が庭に出た。

庭は丘陵の傾斜面に接している。庭の奥から藪地が始まり、藪に混じってコナラ、クヌギなどの雑木が散在している。肋を焼きはじめたのが遅い午後、食べ終わったのは夕方を越して夜になっていた。

二人が庭にたつと、月明かりが芝生に差し込んでいた。藪の端は芝生の始まり、そのあたりから低いうなりが轟く。夜目には褐色の岩と見間違えるチャビが立ち上がって、唸り鳴きをそのままのっそり動いた。サキが指に持つ焦げた骨に鼻をむけた。

「チャビに与えて」

渡された骨をつまむ樋田の指先にチャビが鼻を近づける。噛み取ろうとの構えを見せ、同時に樋田の腕や手先などの臭気を確認する。犬の習性で餌を持つ樋田が敵か身方か、餌か罠かを確認している、骨をガブリと噛み取ってガリリと破碎すると見ている間に平らげた。二本目を要求する低い唸りをサキに向けた。

「硬い骨にかぶりついて呑み込んで、けろりとして次はまだかと迫る」

サキが二本目与えると、庭の中央に戻りしゃがみ込んだ。しかしチャビは二本目には齧りつかず、丘陵に向かい威嚇のうなりを上げた。斜面のススキがガサガサと揺れた。尾根から下りた獣が斜面に潜む。

「彼らはムジナよ。炙りの煙が斜面を上がる。そこに巣くう彼らが食欲をそそられる。肉を炙る夜には必ず下りてくる。でもチャビは気にいらぬのよ。煙をむさぼるのを許すけれど、骨は自分の取り分と渡さない。三本目の骨は藪に投げてやって」

「ムジナの取り分か」

「今が大変。貯えが底をつくけれど、次の食物はまだ出てこない。春の陽気に浮かれるのは人と羽虫だけ、ムジナとタヌキには春の暖かさは窮乏の言い訳と怯えている。藪のざわめきは飢えた獣の祈り」

樋田は三本目をススキがガサとうごめく藪に投げた。するとチャビが落下点をめがけて跳び出した。骨は全てチャビの取り分、ムジナに渡すものかの勢いで斜面を駆け上がる。

抗できない。ガサガサと藪をかき分け尾根に逃げた。

すると藪の端、笹のすき間からムジナが小さな鼻面を出した。鼻をまわして天敵チャビは留守と確かめるため、不在を知ってはすぐ飛び出した。芝生に置き残された骨を啜って、藪の隙間に消えた。

チャビは藪から戻り、ムジナに投げられた骨を噛んでいる。飛び出す前に芝生に置いたかじりかけの肋骨をまんまと子ムジナに掠められたのだが、置いた骨は忘れていたので気にしない。

「プラスチックでマイナス、損得無し。計算を忘れて骨にかぶりついている。犬だっていつも必死」

骨をむしゃぶるチャビを見ていた二人の肩が触れた。

「おーい、シャベットが溶けるぞ」源治は庭の二人が気がかりなので、大きく声を掛けた。

「父から先に話が出ちゃった、留学する話、全て決まったら言うつもりだった」

「語学校に入ったと聞いた日にそんな気がした。来月にはもう日本を出るのだ。少し驚きだった」

「驚きは少しだけなの、本当は大きいの」

「少ないか大きいかではない。強い弱いでたとえれば強い」

「今度はチャビを連れて行く」

戻る翔がサキに振りかえり「同じ時刻、同じ橋、同じベンチ」と答え居間に消えた。翔の背にサキは「今度が最後になる」と声かけたのだが、翔は振り向かなかった。聞き漏らしたのではない。しっかりとサキの「最後」を聞いたのだ。それは事実であるし、事実は受け入れられないから返答のしようがない。

「分かっている」振り向いたとして困惑の作り笑いの不細工をサキにさらけ出してしまふ。

振り返って庭のサキをもう一度見たいとの気持ちを抑えた。

樋田翔が木暮家の夕食に呼ばれる二日前の大学構内、事務棟の廊下。

コルクボードが壁に掛けられ企業からの求人票をピン差し掲示している。学生達はボードに沿って歩きながら、一件ごと社名と職種を確かめるのを習慣としている。しかし今頃ともなればいずれも見古した求人案件だ。

その朝、一件だけ新しい案件が貼り出された。卒業見込みの学生を対象とするインターン募集である。会社名はジンテック社とある。この社名を誰も知らない。

五月なかばといえれば内定を発信する企業も出始める時期である。研修目的のインターンはこの時期には時期外れ、求人活動としては遅れているし、求職の学生も五月研修を受けるゆとりはない。

多くの学生は表題だけ見て、内容を確認せず通り過ぎた。

樋田はその案内に気をとめ、連絡アドレスを手帳に書き入れた。その仕草が学部の友人に見つかった。彼は冷やかしかし文句を樋田にかけた。

「今時にインターンだつてずいぶん遅いな、それでもお前応募するつもりもあるのか」

真意など明かさず、樋田は「気晴らしだよ、研修は役に立つからな」ぶっきらぼうに答えた。

配属先の「総務人事部」関心を持ったのだ。

「営業はうんざり、退屈きわまりないのが商品開発」一度重なる面接で、樋田がたどり着いた率直な判断である。ならば「総務人事部はどのような働くのだから」の好奇心は残る。「企業の要が総務と言われ同期の友人達と同じく樋田もこの時期には就職活動を深く進展さ

せている。二十を越す企業訪問を執行し、面接も重ねた。「前向きに検討している」が数社からメールに入電された。六月になれば一、二の内定の通知は受け取るだろう。社会に出るレベルの上を走っているから、来年四月になればいずれかの会社に入社する。入社式を終えれば、朝から夜に、週に五日や六日も仕事待ち受ける。樋田はその予感が一向に湧かない。「近くに組織を見れば実感が湧くだろう。来年四月からの生活を頭で描けるだろう。あるいは、組織を知って幻滅するかも知れない、いずれの結果でも判断出来る材料を持てる」

企業に入るか、あるいは源治が提案する「小さな花店の経営」を選ぶのかの判断材料となると見たのだ。

連絡先にメールを送ると翌朝、すなわち源治宅の食事のその土曜の朝、ジーンテックから返事が入った。次週月曜に面接を組むとの連絡である。指定時間にジーンテック本社を訪れた。本社は朝川を挟んだ北側、歩くには遠いがバスを使うには億劫、微妙な近さに位置する。

五月の風に背を押され橋渡り坂を上り、翔は気持ちよく向かった。玄関正面は二階の高さまでの総ガラス張り。入り口では守衛が訪問者を懇慫に誰何している。用件を述べるとすでに連絡されていた、敬礼を受け丁寧に入館を許された。扉の前に立つが戸は開かない。その場にと惑う樋田を認めた受付嬢が、膝元に隠したボタンを押す。スーとの音も立てずにガラスが開いた。

気後れを感じながらも中に踏み入る。受付嬢は笑みを浮かべ面接室に案内した。通路、階段の節々に厚い鉄扉が立つが、ノブを回しても開かない。磁気カードを読ませてノブのライトが青く光って開ける。赤い点滅は「ドアはお前を認識しない」との受付嬢から説明を聞いた。開発と製造を擁する建物ならではの警戒を見せつけられた。

面接室で待つはしばし、ネクタイをしつかりと締め、紺の背広を軽く着こなした五十代と見られる男が入ってきた。髪分け方、閉じた口の堅さから律儀な印象を与える。話しぶりは律儀で、口調はその風体と代わらない七三分けの口調の堅さ。彼が受け入れ部署の長、総務人事部門長の藤村であるが、面接の席では樋田が肩書きを知る術もない。

尋ねられたのは「就職活動しているのか、内定は受けているか」との二点。樋田は二十社に応募して三社から前向きの通知受けていると社名は明かさずに答えた。

「内定があったとしていづれかに入社するか、就職活動を今再会するかを思案している」

「言い回しはもったいぶって間接的で、これを直説法に言い替える。樋田が粉ふりかけた返事のニュアンスを、藤村はそれと理解した。目をそらさずに彼は「今時のインターン」の意味合いを説明した。

「急に決まったのだ、新卒者、新人を総務部署に一人入れると。補充ではなく増員、しかしこの時期には活動は中盤をこして終盤、優秀な学生は内定を受ける体勢になっている。

しかし本社はこの一年以上も残るのに、なぜ今では遅いのかと素朴な質問が飛んで来た。君ならなんと返事するか」

突然、研修が始まった気分になった。焦ったものの樋田は、「日本では卒業は三月で、米国に住む本社のスタッフは七月が卒業と誤解しているからかと思えます。まずその四カ月のズレを指摘しな。」

「全てを語らぬうちに藤村が、

「そうだ、そのメールを英文で送って相手を納得させる。文化習俗の差異からビジネス慣習を説明する、こんなやりとりも人事は多いな。」

妥協点としてインターンを実施して有望な学生を捜せとなった。アメリカではこれからインターンが増える時期だからな」

「藤村は席を立ち、樋田を待たせ三十分近くして戻った。

「樋田君をインターン生として採用する。期間中に当方が期待する能力があると認め、君も受け入れるなら採用内定を検討する。いや間違った、採用決定を出す」

「来週から始めると決まった。源治の北行き旅行の同行を断った経緯は「インターン研修に入る」の予測があったからで、応募してからの流れは樋田の予測通りになった。」

二 アキコサイクリスト

総務人事部に社員は全体で五名に満たない少数部隊である。部長の藤村は正面にガラスを張ったキュービクル、個室を持つ。透明ガラスの理由は、打合せしている相手が誰かと分からせるため、ガラス囲みは何を話しているのかを聞きさえない防音である。部長と部員との打合せ中なら誰でも部長室に立ち入れるが、他部署の長との声を詰めたひそひそと話だったら、待遇処遇のからむつかいな下準備に違いはないから、誰も入ってはならない。ちよつとしかい

束事だ。

部員個人の居場所はブースと呼ばれる。前と左右に背丈を越す仕切り、パーテーションが机を囲む。ブースの内側には一人の利用として余裕ある個人空間がつくられる。机は両袖、左の脇にキイボードとディスプレイを載せる小袖の机、右には整理用の棚が置かれる。短時間の打ち合わせならば、個人ブースでも可能で、来訪者が座る丸椅子も添えられる。

出だしの一週は見習いとして書類整理、ひたすら机に向かうだけで明けた。四日を費やした作業を、樋田なりの結論と改善案をこじつけて部長藤村に説明した。資料整理はこれで合格、藤村からは次の研修「採用」に移るよう申し渡された。その場に採用主任の「島田くん」が呼ばれた。

翔と島田は机を斜に向か合う近さだが、ブースの内側にこもれば、たとえ隣だったとしても誰かは見えないし、声すら減多に聞こえない。声が聞こえない理由とはそれを出さない仕事環境のためである。十年前とは大違いになっている、固定電話は机に置かれるがたまにしか使われない。声を出さずに連絡する手段、インターネットメールが携帯メールが主流に替わっている。連絡も打ち合わせもリポート提出も音声なしで完結する。

事務空間に聞こえるのは有線音楽、基本的にクラシックだけである。インターン研修生が人事部に入ったと聞いていても、斜め前のブースで仕事する樋田にアキコは気付かなかった。翔にしても「島田主任」に紹介されていないから、これが初対面となる。初めての面会、相手は誰かと樋田は身構えた。島田主任が部長席に入ってきた。彼は主任の顔と身体に驚いた。島田主任も樋田がそこに待つとは思いつかず、挨拶もわすれるほど困惑し、互いが真顔で見合うだけだった。

先に島田主任が口を切った。「研修の学生さんね」腕を組めばいいのか膝に置くのが正しいか、そんな些細な動作まで気になりだして、その場にぎこちなく座ったままの樋田だが、アキコには目をそらさず「木ヘンに通るトイ、タンボの田です」と答えた。

すでに二人は会っていたし、濃密な身体接触を交わした間柄だった。ひた隠す二人の出会いを通い初めの三日目、昨日の早朝。事務棟の通用階段、出勤にはまだ早い。

パスの遅れにあわてた樋田は、守衛への会釈も浅く済ませて、駆け足で通用口に向かった。始業まで残り三十分と余裕はあるが、誰よりも先に自席ブースに落ち着きたいので、通用口の踏み段を一気に駆け上がった。

脇から体型の丸みを怪しく露わにする人影が滑りこみ、彼の前に割り入った。身軽に階段脇をするりと影は跳びはねて、翔の行く手の登る先、すなわち樋田の目の前をその後ろ姿でふさいだ。あえて割り込むまでの焦りがその者にあつたのだ。

その影は丸いだけでなくとても豊満だった。

くびれた胴と豊かな腰と尻。体部の魅惑の後部があからさまに、ほしいままに階段の二段上で行く手を塞いだ。樋田の目線の水平水準がすっかり丸さに覆われたのだから、その主が女とは理解できた。

お尻と腰を見ただけで年齢を決めるのは実は難しいのだが、樋田にはお尻は若いと確信できる何かを掴んだ。はち切れそうな弾みが丸い尻に隠されるのを見逃さなかつたからで、その上若いだけなく若すぎないとも確信した。

上から下に一目を流して、すぐに左から右に二目を流して足下にそらした。十の一字の二走査で、瞬にして対象を見すかす技能は若い男には必須である。よねちねち見垂らすよりは、さすがに印象を相手に与える。一瞥勝負の瞬間芸とも言える。

十字の流し目で確信した情報はより扇情的だった。

「密着したスポーツ服」「肉体のはじめ様を挑発的に見せつけている」「朝早くからこれほどの剥き出しぶりをなぜ見せつけるのか」そして

「前から見たらもっと大変だ」

それ以上の詮索に踏み込むには、朝から覚悟を決めねばと知った。

背後と前面は印象が異なり、追い越し様に振り向いて落胆する出会いはある。夜目に遠目、傘の隠れでも、後ろ弁天と抑えても、前は天女とときめくのは男の常だ。鼻もくつつく近さに若女がお尻を振り立てたら、男の端くれ樋田はその形状に胸の高鳴りを覚え、艶めかしい前の姿態に妄想は飛んで、前も後ろも理想の美形、若女だとふと狂った。

しかし樋田は前姿を確認できなかつた。

出会い頭の突進なので、姿勢を崩した。段差に躓いて樋田は前のめりで女体に衝突してしまった。つんのめれば顔がその女の尻にぴたり重なり、女の尻は寄りかかる樋田を避けられず、その反動で女も前にのめつた。女は左手を段について身体を支え、右腕は尻を攻める頭を避けようと掴んだ。

それでも頭は攻め込む。お尻真ん中の谷に男の鼻がのめり込んで、

谷間の底の深みに埋没した。鼻が塞がれても息を吸い込まねば心臓が止まる。息の吸いこみは無意識反応に違いないが、無意識の奥である思惑が樋田の頭にもたげた。

「ここはあそこ」と無意識に思いつき、それなら「今ぞとばかりに思いつきり」ついでに「どうだとばかり胸一杯」に女の尻を吸い込んだ。

鼻をくすぐり肺に漂うその匂いは甘くて香ばしく、男をこれほどにも酔わせるのか。たった一息の吸い込みで樋田は陶然とした。

女は通勤と運動を併せかねて自転車で出勤している。運動後にも体熱がまだ身体に残り、女特有のかぐわしさを汗に混じえて発散していた。お尻からはとくに強く発散していたのだろう。その香にあてられたのだろう、樋田は女の顔も確かめずに勝手に納得した。一瞥の確信をはるかに侮る判断で、こちらもまた妄想だ。

「美しい女だ」

お尻の匂いで女の美醜が判定できれば、顔はいらない。

樋田は尻に鼻をあずけたまま、身の崩れ落ちにかろうじて耐えた。その体位は彼には都合がよかったけれど、女性には尻をつかまれ双丘の谷間に鼻先つつこまれ、匂い嗅ぐままにされるのはハラズメントと反発するしかない。

「キャワー」小さな声で女性には振り返った。階段は二段の下、見知らぬ男が両腕でお尻を抱え、頬を寄せて気持ち良くもたれていたのだ。

女の服装は会社構内には場違いの解放感を露出していた。正面から観察しても、側面をちらと流し見ても体形を空間に浮かあがらしたスポーツ服。

アリーナ、スタジアムで目にするスポーツギアだが、朝の仕事場にはあり得ない。尻を抱えられてうろたえた女は島田アキコ。朝の会社構内をこんな服で走ったのは、彼女はスポーツ自転車通勤しているからである。

愛好家はロードバイクと畏敬こめて語る。ひたすらペダルを踏みロード幹線道路を高速で走行する。しかし駅まで買物とか、子供の送り迎えには使用できない。

軽量だが高速にはしむ華奢な車体。長距離を走り抜けて、乗りに快適さを与える。乗り続けて多量に汗を促す。ジーパンにシャツで数キロも走行すれば汗まみれになる。汗を吸い上げ発散させるウエアを着しなければ乗り切れない。

汗を吸い上げ発散させる機能の代償は身体線の浮き出しである。服装が裸体を強調する。通用口を入れてすぐに右手に女子着替え室、そこに入り込めば、ベージュのブラウスにツル―ネイビーのタイトスカートに替えて、

挑発シクリストも無難なオ―エルに早変わりする。その距離、駐輪場から通用口まで三十メートル、その距離を全力で走り抜けるのが自転車通勤のアキコの最終コーナーとなっていた。朝早い時間なので妨害などあり得ないのが、この朝だけは違った。樋田との初出逢いの顛末であった。

昨日の出会いを思い出してしまって、冷や汗こそ噴き出たが次の言葉は出てこない。紹介したものの睨みあう二人、不器用な沈黙を打開できない。その理由は面会の目的を知らせていないためと藤本は解釈した。

「島田くん、彼に初めて会うのだね、研修で三週間働くことになった、樋田翔くんだ。人事シートの整理をしてもらった。二週間だけ採用の補佐で働いてもらおう」と訂正するほどのお人好しではないから兩人とも初対面を装う。

「学生身分ですがよろしくご指導お願いします」
 明るい声と笑いで初対面のフリを演出して、ともかく抱きつきの際緯を無視したかった。アキコは微笑みを一切見せずに、言い回しには冷たさも明るさも加減しないで樋田を一瞥して、「指導とかは無しにして、まず仕事手伝って」と無愛想に答えた。
 主任は管理職ではないとの意味で部下を持たない。担当する者がアキコ一人であるための主任、そのアキコにしても、採用の仕事経験は一年を越える程度。指導や教育は無理であろうが、進め方についてには指示できる。

彼女がジーンテックに入社したのは十四ヶ月前。勤めはじめの一週間、照明の届かない事務棟の廊下を歩くと、出会う男が振り返る。二度目の出会いは立ち止まり、その背を目線で追う。アキコにはすれ違いの値踏みの目つきも、通り過ぎても背中を刺す眼の光のムズ痒さも迷惑だった。

会社、仕事場と言っても男が多く働く。見知らぬ女性がさっそうと歩けば気になるし、若ければさらに目立つ。アキコなりに見目が良ければなおさら視線が追いかける。

以前は会計員だった。都心の中堅商事会社で三年半働きその期間、同僚から執拗な嫌がらせを受け、もうこれ以上は無理と辞めた。会計処理を一人でこなせるまで体得したので、再就職には心配がなかった。二カ月一人暮らしを楽しんでジーンテック社に応募した。募集する職種は経理。資格は十分に備わる、自信もって応募書式を送った。二回の面接を経て採用決定を受けた。しかし配属された

のは人事、配属の変更は入社後に知らされた。ジーンテック社はアキコが入社した時点で従業員五百人、中堅企業に成長していた。社屋は東京の西部、多摩のとある小さな市の工場団地に立地する。

アキコが住むのは多摩地区でも区部に近い東側。ジーンテック社に応募する裏の背景があつて、これが実の理由になるのだが、それは事業所とマンシヨンの相関位置である。ジーンテック社は多摩川の中流あたりで分かれる支流朝川近くに位置する。一方アキコは下流に近い市街地にマンシヨンを所有するが、その共同玄関が多摩川土手に面している。

左岸土手には遊歩道が整備され、上流から川口まで貫通している。面接では決して漏らさなかったが、その遊歩道にチャリを走らせたらかねて願いの「自転車通勤、リン通」を実行出来る。

マンシヨン六階から見下ろすと、スキと石くれが転がる河原が広がり、その中央を川面がゆったりと銀色に流れる。

土手の上面をアスファルトで平坦に固め、人が通う遊歩道とした。モーターバイクを止めるため所々に杭が打ち込まれている。遊歩道の命名通りに当初は歩行者だけが通った。駅からは遠回りとなるので、遊歩にはやる人の数はそれほど多くなかった。間もなく自転車通行が頻繁になった。ロードバイク、高速走行の練習に使われ始め、彼らは「サイクリングロード」と勝手に呼び始めた。

ジーンテック社に向かうにはマンシヨンの通用口で自転車にまたがり、土手に乗り上げ遊歩道を漕いで三矢橋から朝川に入ってなお漕ぎ続けて三〇分、会社の通用口に到着する。黒スーツ着用した入社日はピンクラメのバイクと色の釣り合いがとれず断念したが、翌日からは新調のスポーツ服を身につけ、念願のリン通を実行した。

二人は部長の個室を離れ、アキコの個人ブースに入った。衝立の内側には机と椅子、一人が座れるだけの空間が開く。樋田は丸椅子を引き出して座る。アキコが肘掛け椅子を回して樋田に向かうと、二人の膝が接触した。膝まで触れる合い向かいとは、顔の向かいも間近に迫る。それだけの近さでも翔を忌避する表情はアキコに浮かばなかった。

仕事内容の説明を始め、一休止してアキコが尋ねた。「キミは採用で何したいの」
「今までは書類整理だけなので、人と対話したい。部署からの採用計画、需要などヒヤリングするときには出向いて話を聞きたい」
「アキコの答えは「ムリ、原部の担当者に私は出向かないから」が正しい。というのはどの需要にも中身の变化はない。いつでもどこ

でも希望は一つのステレオタイプに収斂されるので、聞き取る必要など全くない。

一年勤めて組織とは「輪切りにすればどの断面も金太郎」と真実を悟った訳だ。しかし会って三十分の樋田にこんな現実を語る必要はない。今のところは表向き、建前を通す。

「必ず出向くと言わうわけではないけれど、要望が二、三度重なってから足を運ぶ」面倒くさいだけなのに偉ぶった。

「それに同行したい、一人でも出向ける機会が欲しい」

樋田は積極的だ。この熱意を利用すれば、懸案の幾つかの案件が解決できるとアキコは企んだ。「関西に出張させられるかな、藤村部長も気に入っているようだから可能か」とアキコは踏んだ。

そこで、

「二の案件で現局の会議に陪席したりマネージャーと直に面談しなければならぬ。一つは下の階に出向けばそれで解決する。相手と予定があればすぐに実行できる。」

他の一つは出張からみ、日程が決まれば、代わりにあなたが出向くかもしれない、そちらは単独、そう予定して」

言い終わってアキコはマーケティングに電話を入れた。部門長はすぐに来てくれで予定が取れた。

「明日の十時にマーケティング部門長と打ち合わせ。もう一つの関西支社には今メールを入るところ。来週の予定で調整します」身体を半ひねりしてスクリーンを睨みながらキーボードを叩く。数行のメール文はすぐにまとまって送信コマンドを押した。

「準備しておく知識などはありますか」

「過去のファイルがあるから読んで」と指示を入れて

「ちよつと待って、あなた、守秘義務のサイン終えている」

個人ファイルを開けて開示資格を確かめた。樋田には許可はでない。

守秘義務とは業務上で知り得た会社の情報を社会や他企業に漏らさない誓約である。個人の情報を扱う人事部は「漏洩」には特に過敏である。就業する者の住民票を確認して、同居する家族へ聞き取りが実施される。その内規は正社員のみを対象としていた。パート員はもちろん契約社員にも資料接近を許してなかった。

樋田は一ヶ月の契約社員である、契約社員で初めての資料解禁者となる。

樋田の住所と居所に目を通すと、住所は北関東の地方都市に在住のまま。同居の家族に記載はない。

「住民票の所在地を確認の電話を入れる事になっている。ご両親にそう伝えて」

「同居する家族はいません」樋田は六年前の事故を語った。

「悲しい別れを思い出せてしまつてご免なさい」

アキコは高校一年、十五の歳で父を失い、三年のちに母親の死を体験した。十五の年齢にして樋田は両親を同時に失つたのだ。感情を交えず事実のみを連ねる語り口には翔の寂しい心情が滲みでていた。話す声がとても重くなつたのにアキコは驚かなかつた。

「同居親族ではないけれど、親しい親族がいます。その方が私の居所を証明してくれます」

樋田は伯父の木暮源治の名をあげた。アキコは履歴書の上に、その名と連絡先の電話を書き入れた。

「伯父様に連絡をいれて書類通りにそこに住む人物であると証明されれば、それで有資格となる」

自席に戻る前、声を落として樋田は、

「主任、昨日はいささか失礼な行動をとつて申し訳ない」

「思い当たりはないわ。何の事なの」お詫びの理由など知らないのとぼける。

「朝の通用口の階段で……」お尻を抱いて匂いを嗅いだとは言えないのでその後は濁した。

「まあ、私の後ろで躓いたあの時の人だつたの、あなたとは気がつか

かなかつたわ。世の中つて狭いわね」

見え透いた演技でとつくの前に気付いていた。もとぼけた反応を崩さないアキコに樋田はダメ押し

の攻勢をかけた。

「躓いた拍子に腕が余計な物まで抱きこんでしまつた」

「余計な物ですつて、言いがかりよ。女の大事な部分なのよ」

鼻がヒクと開くとアキコは我慢ならぬと、

「それにあなた、ずいぶんと長く掴んでいたわ。あんな場合はすぐに手を離すのがレディへの礼儀よ、手を離して頭を下げ

て申し訳ないと言で謝る、それくらいがフツ―よ」

「あの十数秒は大変申し訳がなかつた。理屈では主任の言うとおりだけれど、とっさの出来事、特殊すぎた状況、言うとおりのフツ―の機転が浮かばなかつた。

何を掴んでいるのか、鼻が何に埋まつたのか、気付かなかつた。ただその柔らかさに動転して、それと気付いてはつとして手を離そうともがいてもまだ抱いていた。

すつかり遅れてしまつた。今こそ申します、申し訳なかつたと。そして同じ状況がもう一度起きたら」

後ろにのぞけてアキコがすこしだけ笑った。右の頬を縦に切るえくぼ、白い歯から笑いがあふれ、左の頬はホオズキ色に染まった。デイスク脇ブースの隙間で打ち合わせていた二人、対面する隔たりが狭まり、アキコの丸い膝が樋田の手と触れるまで接近した。「樋田クン、私を主任と呼ばずアキコと呼んで」

男と女がいつに出会おうと歳の差は生まれ年数の差で太陽系の法則だから、二人の年差はいつまでも変わらない。いつの年代で出会うかで、後の生につきまとう、心象風景の記憶の辛さが後を引く不幸もある。

少年十二と少女十七歳が出会っても出会いの感動は発生しない。男三十二歳が女三十七歳を知ったらどうなるか。火花が飛び散るかも知れない。しかししいずれか退くから、共に追い共に求める狂いの奈落には落ちこまないだろう。

二十代で五歳の差は、逆の年差であればそれが運命といえる。最も危ない出合いで二人は穴に墜ちる。

熟れ頃の女は二十七歳、男は二十二歳は怖いもの無しの生意気盛り。女が男を焚きつけて、男が遊び道は回りの辻と受け流しても、ふとした刹那に想いがたまたみ重なり突きはねれば悩み、せがめば苦しむ。捉えられるかおとされるのか、乱れにほつれが絡まれば女が求めて男が果てる。

翔とアキコ、二十歳代の逆の五年の差、結末が幸福ではないとは出合いから見えている。

ジーンテック社の課題は売り上げ増でも製品開発でもない。組織の整理である。企業のあり方として曲がり角にきている事情があり、経営の骨格を作り直す必要に迫られている。新たな評価制度を導入すると決めた。大手企業と契約を結び、新規制度の導入がまとまった。

旗振り役を誰にするか、人選はいまだ進んでない。部長藤村の腹案はあって、取締役の年長の者を責任者に選んで実務担当にアキコを当てる。「アキコを係長に上げて責任も持たせて」とまで計画巡らすのが、反対が予想される。女に評価されるのは、男として嫌だとの反対である。

アキコ旗振りはあくまで私案として藤村の腹にしまった。

その前にアキコの採用の仕事を減らし、アキコの工数を浮かせる、新しい職位に任命する下準備である。旗振り腹案も下請けもそれが下準備を兼ねるなど、本人には一切知らせない。会社とはそんなモノだ。

部長個室にアキコが呼ばれた。分の工数が浮くはずだ。応募者は多い。一つの求人にも百を超える応募書類を送られる。履歴書、経歴書、個人的申立書。書式をすべて読み通し、応募者全員を次の段階への優先順に仕分ける。これが言うところの一次の仕分け。今一人で取り組んでいます。読みとりながら、個人の資質を探る、それ以外にもいろいろと。」「キミの時間配分を見ていると、この工数が最も長い。その作業は本来的に単純で外注化してもリスクは発生しない。」「それは違う。」「と言いかけてやめた。一次仕分けに手間を掛ければ、以降の仕事が簡便になる。結果として会社全体の仕事量は減る。その狙いで入念に時間を費やす手順をアキコなりに打ち立てた。部長はその入念さを「単純」と決めつけた。「何も分かっていない」とは口に出さず顔にだっけて表さないが、部長の言い方にはアキコは納得しないから、不満が顔に一杯は隠せない。アキコにしても自身の方法をこれまでに藤村に系統たてて説明しなかつた。今になって声に大にしたところで、反論しているだけと否定される。藤村の言い方から類推すれば外注化は決まっている。アキコにもそう聞こえた。」「島田くんが採用主任で仕事を開始して一年近くが経過した。外注化が決まれば、これは君にも良い機会になる。」「何が「良い機会」なのかを明らかにしないで、藤村の真意をアキコは理解できない。藤村はアキコが沈黙を続けるので、」「釈然としない風だな、でも引継はしつかりまとめとめてくれ。新しい分野に挑戦できるから、引継は早いほうがいい。松木に連絡を入れてくれ。」「受け取った名刺には「人材コンサルティング松木義一」とあった。電話を入れ本人は外出中ながら事務員経由で、初回の打ち合わせの時間を決めた。採用から離れるのは決まった、樋田の研修を採用に振ったのも、外注化計画と関連があるかも知れないとまでアキコは勘ぐった。その後の仕事については藤村から打診は未だない。席に戻ってパソコン画面を眺めても、気持ちは混乱したままだ。頭を机に落として考え込む姿は混乱を越えて落胆しているとも見える。」「主任の私を抜きにしてすべてが決められていく。その上まるでミ

スを連発しているかの判定」
 被害者意識が頭を出して、部長への不満と会社への不審が湧き上
 がった。愚痴をパソコンにこぼしたくなるが、不平を抑えるのは仕
 事の始まり、自分に言い聞かせたら涙がキイボードに落ちた。
 パーティションを叩く音に振り向くと、樋田が背伸びして顔を出
 して「アキコさん」と声かけてきた。「相談があるので、いつそ
 ちらに行けば」
 「今はちよっと都合が悪いわ。
 あら、違ったわ。こっちの仕事なんて後回しにするから今すぐに
 こちらに来て」
 断った理由は涙が滲む頬を見せたくなかったからで、直後に「涙
 顔を見せたっていいじゃない樋田くんには」と思い直した。それは
 甘えか策略か、同じ親無し、抱きつかれた仲間意識か。
 樋田が移動する短い間をぬって、コンパクトを取り出し泣き顔を
 のぞいた。瞼は赤く膨らみ、涙の落ち流れが一筋二筋、頬に溝を切
 った。白粉を軽くはたけば流れ痕は消せる、その寸秒の粉はたきが
 出来ない。
 言いつけとおり樋田はやってきて、丸椅子を出して座った。泣
 いた顔に化粧の崩れ、裸の女顔を曝してしまふ。
 衝突の内側は暗い、狭い内部に座り場所を見つけ、膝に手を乗せ
 ると樋田はアキコに向かった。彼女の話す声に震えが混じり、目に
 青い翳りがみえる。眼差しのきつさが消えていた。
 平素とは異なるアキコは、唐突な打ち合わせが理由かと樋田はあ
 わてた。相談とはある意地悪い質問への対応方法で手に持つメル
 にはジーンテックへの非難が並び書かれていた。いらだつ応募者へ
 の返答文例はあるのかを樋田は知りたかった。いらだつ応募者へ
 アキコは定型回答をサーバから引き出す手順を教えた。要件は
 終わったので、長居はご迷惑、しげしげ顔を見るのは失礼と、樋田
 は振り返りもせず立ち上がった。戻る樋田の袖をアキコが止めた。
 「待って、私から連絡があるの」
 座り直した樋田にアキコは前のめりに椅子を進ませた。ブース内
 の空間がさらに縮まった。暗がりには小さな火がぼつと灯ったのはア
 キコがその潤む目を樋田に向けた。声は無言に「もつと近くに寄って」と語っ
 た。樋田はアキコに近づき目の前にして見ると、瞼は膨らみ白目に
 赤い筋が残る。
 アキコは気を整えた。空気を大きく吸い、長く息を吐いた。彼女
 の吐息を樋田は正面で受けた。すると樋田の体幹の奥底がなぜかビ
 ンと振れて昂進した。下身がもっこりと励起した。この部位が反応

するのは本人意志とは無関係の不随意反応なので男は誰も制御できない。アキコの吐息に樋田は目眩を覚えた。

嬌めた胸奥から吐く息が、なまめいた匂いを漂わせるのをアキコは知らない。その息吹をくらう相手が若い男ならば、きつと身体変化をそのかす。いわば悪意の息吹だ。アキコはそんな事がみだらな誘いとは思ってもよらないから、もう一度息を胸奥まで深く吸って樋田の鼻先でハーツフと吐いた。

樋田のそれはズボン前を盛り立てるまでに起立した。

暗いからアキコに気付かれないのは樋田にとって幸いだったが、別の意味では不幸だった。丸い膝をそろえてアキコはそんなこと知らずに、当惑する樋田に近寄ってきたのだ。

「住所確認だけれど、社員並みに確認するという結論なの。午後には伯父さんに電話を入れる予定です」

「アキコさんから電話が入ると伝えてあります」

「ありがとうございます。もう一点、明日の四時に外注業者と打合せするから、樋田クンに出てもらいます。打合せの内容は明日知らせる。」

「報告は終わりよ」

「ちよっと足がしびれて、でもすぐに戻ります、おっと立てない。しばらく待って」

短い打ち合わせの中に淫らな反応を抑え込めなかった樋田は、自席に戻っても熱い余韻を体幹下部に残した。熱さを鎮める手だては持たず、硬直な固さを耐えた。

一方アキコは、樋田との面談を心地よく思いかえし、気楽な時間を過ごせたと素直に喜んだ。連絡事項をとつとつと語るなかで、会社、部門へのとりついでいた嫌悪を解消できた。打ち合わせの半ばから樋田が目をぱちくりして、拳を膝上で固く握っていたのは自分の好意と受け取った。不如意の蠢動を抑える努力にすぎなかった。アキコの誤解である。

頃合いを見計らい、会議室に移動してアキコは木暮源治に電話を入れた。電話口から「北山台花店です」と女声が聞こえた。

名称は樋田の説明と違くない。シートに注釈を入れた。社名を告げ樋田翔の住所確認として木暮源治へ取り次ぎを依頼すると、その女性「父は」と言つて「店長は」と訂正した。

「外出中です」つれない返事で、すぐにも電話を切りたい気配が伺えた。

アキコはあわてて「木暮様から電話を返していただけませんか。電話が源治の娘であれば、翔には従妹になる。声の質から十代後半と

アキコは類推した。数分後に電話が返った。へりくだった口調で源治は「翔は甥です、実家はサノウ市、両親と六年前に死に別れ：アパトから大学に通学」

無事に終了、電話を切ろうとするアキコを木暮源治がなぜか止めた。「翔の性格判断に不利にならないよう」と前置きして、

「年齢には不相応に落ち着いてなぜか暗い話し方の印象があれば、親との死に別れの為だけではない」

「落ち着いているけれど暗い印象は気付かない」とはアキコの返事だが、一瞬だけ感じられる樋田の重い語り暗い表情。彼の悲しい表情が気になっていたので凶星の指摘であった。

「実はその前、生きる前の別れがあった」

源治は翔が生まれる背景、樋田姓を名乗る経緯を語った。樋田翔の個人内容に立ち入る源治の説明は、アキコの調査に不要。人事票にその背景を書き込まないのは正しい判断だが、情報を聞く行為すら不要なので、打ち切らねばならなかった。

アキコは源治を話すままにして、樋田が隠すその前半生を興味深く聞いた。

「妹の奈津子は腕のたつ美容師だった。若い頃立石で働いていた。アルバイトの「ヨツチャン」とデキてしまった。その男が翔の実の父になるのだが、生まれる前に二人は別れた。

実家に戻り翔を生んだ。翔の名は儂がつけてやった、空を飛ぶつもりで人生を歩めと願った。翔が二歳になる前に奈津子は実家を離れ、サノウで美容室を開業した。腕は確かだったので店はうまく立ち上がったが後家はたまたまなかった。仲間うちの樋田と再婚した。

翔は樋田誠二の養子となった。

奈津子が籍を移すのは成り行きだが、儂は翔の養子には反対したのだ、翔が樋田に取られてしまう気分には落ち込んでな、今でもあの落胆気分を思い出す」

熱こもる源治の語りは続く。

「奈津子の再婚は翔が物心ついてからなので、誠二が実父ではないと知っている。成長するにつれ誠二との関係がとげとげしくなったと聞いたが、血のつながらない親子だからだろう。奈津子は翔には「ヨツチャン」について何も語らなかった。

そしてあの夜、トラックと正面衝突。連絡を受けてすぐにタクシーでかけつけたが、翔は母の死に目には間に合わなかった。だから今もその名ヨツチャンを知らない。

しかしなあ、主任さん、翔が何かの拍子にふと見せる「暗い印象」をもって翔は「性格が暗い」と判定しないで欲しい」

最後は「判定で不利にならないよう」と願う源治の言いぐさで

ある。話し出しがすでに源治の作戦なので、話す抑揚に「全てをうち明ける善意の伯父」に成りきって、計略を回しただけである。ジーンテック社も翔の情報を、源治の持つ同じ材料と密度で判断してほしい、この作戦を源治が思い立ったのだ。生まれの裏面に言及したのは、彼と同等の情報をアキコに刷り込むためだ。で、その外観だけで正否を決めるなど。彼の後ろには暗い陰がつきまとう、これを語るのが源治の計略なのだ。

源治の計略にアキコは思い至らず、翔の裏話にふと釣り込まれた。源治が仕掛けた策略の「すり込み」成功したものの、それが別の方向に働いた。

電話口でのすり込みの効果は、アキコがそれまでとは別の座標から翔を見つめる契機となった。生き別れと死に別れの交錯が樋田の心の奥にうごめくと。

「父親はヨッチャン、その方の姓は」掘り下げた質問は会社規定から逸脱した。

「よく聞いてくれた、主任さん。しかし、奈津子はその姓を農にもあきらかにせんだった。農が知っているのは立石で美容室に配達していたアルバイト、大学生のヨッチャンとだけだ」

「奈津子はその時二十七歳、男は大学卒業前なら二十二歳。これからは想像だが、社会に出ようとするとする男に孕み女は足手まとい、己の将来を優先しておろせと迫った。奈津子とは遊び、翔と名付けられる生まれくる子を己の人生設計に組み入れてなかった。若いのに遊び人だった。農は今でもそやつを憎んでいる」

「死に別れと生まれる前の空の別れ、思いが二の悲しみに塗りこめられた心の襞が翔の心の地、心の陰を重ねる別れが恨みと受け止められ」

源治の説明にアキコはため息をゼイと漏らすだけだった。

電話を切り、懐かしい感情にアキコは浸った。翔への親しさが強く湧き上がった。

似通う境遇に安心した。両親と死に別れているだけではない、母奈津子と実の父ヨッチャンの年齢の差がアキコと翔の年差と同じ、母が年上の逆の年差も同じ。同僚、部下などの職場の関係から外れて親しい友として翔を見つめたい。そう思いこむと心がなぜか暖か

くなつた。
 「翔は弟、私は姉」あり得ない錯覚が心によぎつた。次にアキコは
 翔がアルバイトしていた花店を想像した。
 「北山台の花店に行きたい」
 落ち着いたたずまいの店先、週末の午後、ウインドウにはバラ
 にキキヨウ、カーネーションその他あらゆる花で飾られている。色
 とりどり形さまざまの花に囲まれるテーブルには青い花瓶ともつと
 大きな白い花瓶。他に客は誰もいない静かな時間に翔と出会いたい
 と思つた。
 翔の従妹のつれない対応は気にかつた。一片通りの対応は慇懃
 のうえ、突き放す冷たさをアキコは気に留めた。
 「ポタンの掛け違いみたいないな誤解、面と向かえばあのかたくなさだ
 って解ける」
 翔の従妹とも会いたくなつた。
 両親との死に別れと年齢差、二の環境での一致に気付いたアキコ
 だが、三つ目の相似には思い至らなかつた。それは奈津子もヨツチ
 ヤンとのつきあい始めに「弟」の親しみを抱いたその心情である。
 男と女のおぼろげな出逢いは五年の逆差としたが、出だしに近親の
 感情がまとわる。実の弟は選びようがないが仮想ならば好みで選べ
 る。女が選ぶ「弟」は体型や表情など種々あるだろう。その近親感
 情の裏にはやるせない愛着、シンパシイが隠れる。感情交錯を感じ
 ながら深みに入り、進退選べぬ詰まりに男女の関係にはまりこむ、
 そんな愛かもしれない。
 翌日、村木との打ち合わせが近づいた。アキコは藤村に一片のメ
 モを渡した。
 「先日の打ち合わせの後、作業手順を改めて分析した結果ですが、
 一次仕分けは全て外注に渡せませす。面談と評価レポートも外注化で
 きませす」
 藤村が示唆した範囲を大きく超える全面委譲となる。発注する側
 すなわちアキコの手元には書類の整理と保管しか残らない。それは
 単純作業なので正社員のアキコが持つ範疇ではない。
 「おう、ここまで」と藤村は同意するだけだつた。
 受付から松木の到来が伝わり、十分後に合流するようアキコに命
 じて藤村は会議室に向かつた。アキコは「あなたは二十分後に参加
 するのよ」と樋田の耳元に囁いた。
 松木は人事全般をカバーするコンサルタントである。名刺の交換
 のあとに引き継ぎの打ち合わせに入るのだが、初対面の常としてア
 キコと松木、互いに見合つた。アキコが見た松木とは、

白い筋が幾本か髪に混じる。揉み上げは豊かに頬に下りて、顎を横から隠している。鼻の下には黒い髭を蓄えている。額の皺と目の窪みから、松木を四十台半ばと見た。

初対面の男に女性が密かに試す慣習、アキコは独身なのでたびたびそれを試みるが、松木にも実践している。女の流儀で男の格を検分するのだ。

顔と風体を、これが一段目の篩い分けで、アキコの基準値は厳しいので、かなりの比率で男を篩から落とす。松木には不合格の原因はどこを探しても見つからない。年齢は二十歳は上であろうが、この年差は受け入れられる。三十代に接するよりも四十歳代は付き合う気持ちにゆとりを感じる。

四十半ばは男盛り、うぬぼれがのぞく。黒に近い濃紺の背広上下、艶の鮮やかな布地には皺の重なりは見あたらず、生地の素性と仕立ての良さがうかがえる。松木はウエルカムだ。

ここまでする儀典項目である。今後の付き合い方、男女交際のプロトコルを決定より重要である。今後の付き合い方で瞬時に判断した。次の検分は外見

アキコは目をおとし松木の指を盗み見た。左の薬指に、当然はめられている筈の銀の指輪が見あたらぬ。その指が銀のリングで防衛されていいるか、リング無しが無防備にむき出されるか、アキコの関心はそこにあるから、裸の指が臆面もなく、裸体に露出されるのを見て驚いた。

あえて左の薬指が露わになる手組を松木は保ち、アキコが見おとすままに裸体を晒した。

その年格好で独身と主張するのか、それもこれほどの紳士が。

「この独身には性悪女が幾人もからまる。うっかり手出しは大やけど」

テーブルに曝された指の裸形をアキコは信用しなかった。それにしても裸の薬指が強く独身女性の関心を惹くのは事実。アキコにもこの事実は効果的である。

個別の目標を経時的に設定する図面をロードマップと称する。松木は紙切れ一枚を提示しロードマップとした。たしかに時系列と達成目標が書き込まれていた。見た目は簡便な図式で、内容も簡素でわかりやすい。

「引き継ぎに当てる時間が少ない」アキコには簡潔さが不満だ。

「指摘に表情一つを変えず松木は、

「十分です。採用の仕事とはどの会社も同じ。主任のあなたから仕事内容を聞き、あるいは今までのやり方を踏襲するなどは必要ありません」

「判断基準や採用側の要望などは私から聞いて頂くほうが、松木さんも安心するのではないかしら」

「そこが必要のない部分です。またとめて資料を出し頂ければこちらから報告を返します」と自説を撤回しない。

松木の言い分はとどのつまり「どの要望もたった一つのステレオタイプ」で、現場が幾つあっても答えは金太郎と決めつける。それはいつも同じと見切りをつけていたアキコ持論とも通じるが、初の打ち合わせでアキコは同調しなかった。

「松木さん、この仕事経験も長いと推察します。しかし外注先になるので、仕事を出す方のやり方を聞いてくれないと、無用に混乱する怖れが」アキコも譲らない。

言い終わらないうちに松木は立ち上がった、アキコの肩に手が触れるほどに近づき、何をするかと腕を固く胸に締めたアキコの脇を、その怖れなど気にせず、吹く風が流れるのかに通り返ぎた。背後にある窓に向かった。見下ろす公園は桜の名所で、遅咲きの八重が盛りの春を迎えていた。会議とはおよそ関連のない感嘆符が発せられた。

「花がキレイだ」

「明日が満開、今日の夕べは金曜の八分の見頃に見盛り、花見者が集まる。」

でも枝垂れ八重の八部咲きは会議の話題ではないわ、話を戻しません。このロードマップの単純さに。なぜって最も大事なところがすっかり抜けているわ。期間の短さ、打ち合わせ内容の空疎さ、長さや密度が足りない。欠陥は致命的です」

「それは心配しすぎで、余計な御心配は仕事の……」

言いかけて止めた。突然部屋に出現した第三の人物に仰天したのだ。開閉の音が聞こえなかったからドアから入ったとは考えられな。床に浮き上がったのか、宙からひねり落ちたのか。音も立てずにテーブルを回って、羽根が風に止まるかのように静かに座った。

松木の目の前だった。若い男だ。無言で腰掛けた男を目にして松木は身体が固まった。松木の視線も鼻先の向きも、しゃくる頸の角度すらもその男一点に向けたまま、硬直した背、頸はその方向からびくとも動かない。冷たい汗が額から幾筋か落ちた。吹き出す汗の原因に思いは当たらない。だから松木は若い男をじっと見ていた。背にも汗がたらりと這

いだした。目の前に座る怪物に視線が吸い込まれ、心が怖れに取り憑かれ、口を開け閉じるのも忘れて彼を見つめていた。

あり得ない現象が発生している。狂いの因果の一巡りがはじけて、この会議室に化け物を呼び寄せた。松木への報いがこの世この場で発現したならば、過去が逆転したため報いの花の徒な開きを会議室で見せつけられた。

生と死の逆転を認める勇氣だけがこの男の奇怪さを納得できる。その因果を知っているのは松木だけで、男の出現に驚いて黙り込んでしまったのも松木だけだ。空気を呑み込んで息を吐こうにも肺は止まり、苦しさは彼だけが胸をあえいだ。

奇怪とはあまりにも似ているのだ。

彼が死んで、それから流れた年月を数えていた子と酷似している。彼は、死んで、それから流れた年月を数えていた子と酷似している。彼はずいぶん以前に死んだ。いや、生を禁じられたから死ぬことすら許されなかった。

生まれる前に死んだ子が、後の歳月を生きながらえて、二十数年の経過の今に現れた。松木が常に思い浮かべていた死者の年と格好。生まれなかつた子の歳を数え、生きながらえたらこんな若者に成長しているはずと描く風体、顔つき体軀。背広姿で歩けば彼の姿勢こんなはずとの思いこみが、床から浮き上がったその若者の顔と姿勢にまさに重なった。

無言で目の前に座るのは彼の生まれなかつた子だ。「鬼が地の底のから這いあがって、大事な場で当惑させている」彼自身への罰と身震いした。因果を誰も知らない思い直し、見てくれだけは平静に装えると死に損ないの鬼が自己を語った。

「樋田翔といいます。採用で島田主任を手伝っています」
 姓が樋田と聞いて怖れは消え、冷や汗は止まった。水子の生き戻りではなかつた。凍り付いていた首筋も解凍した、顔の向きをギグと戻して、開けたままの口を閉じて、

「聞き慣れない名前です。ご出身地はどちらでしょうか」

樋田は北関東のある山岳の地名を上げた。その地名を知らない松木はさらに安心した。樋田身上の質問は続く。

「樋田とはかけひ田とも書きますね、上水、笕で灌漑する山の水田の意味です、美味しい米がとれる、御実家は農家ですか」

「谷間に住む祖父は、蓑で隠せる小さな水田と鍬ふり下ろしても泥が返らない畑を耕しています」

聞いていたのは「板東の大河の農家、関東平野のど真ん中」山中とは聞いていないと安心し

「気のせいだ、過去が逆転するなんてあり得ない」気を取り戻した。「お祖父さんも元気で何よりですね。翔さんは里帰りしますか」

樋田は戸惑い、この問いかけに返答できなかった。祖父の住む家に「里帰り」するとは言わないし、誠二の保険金でもめた祖父とは絶交している。貧しい山岳農民は祖父ですらない。

複雑説明は無視して「しない」と一言答えるのが正しい選択だが、ぶっきらぼうに返答したところで、その先に何が戻るかの展開を読めなかつた。

「樋田翔くんには外注の過程を理解してもらおうと呼んだのよ。藤村も了承している」この打ち合わせで、樋田の悲劇を話題にする必要は無い。

「樋田さん、主任島田アキコさんと引き継ぎ作業の内容で意見が違っていた。主任さんが求めるやり方で打ち合わせを重ねるのは、単に時間を無駄にするだけと私は信じている。その理由を語る為に、窓の花の綺麗さに入ったところでした」

「その時樋田くんが入ってきたのよ」

「主任さん、言い過ぎたかも知れないが、作業は任せてください。二人とも振り払おうと試みず、指の重なりがしばらく続いた。両者は互いに薬指の裸感触を確認していた。絡み合いは解けず、アキコは松木を払おうとしなかった。それでも次週の金曜が2回目、最終打ち合わせと決まった。

アキコは樋田を自席に呼んだ。樋田は松木に否定的だ。「彼のやり方は単純です、単純は悪くはないけれど、複雑な状況とは現に存在しているから、それを理解したうえでないと陥穽にはまる。次の打ち合わせでは、彼の回答をしつかり検証しなければ。それが主任の仕事ですよ」

「あなたはアキコさんに関心があったようね」
 「実はアキコさんが書類を取りに会議室を出ていた間に、かなり個人的な質問してきたのです。父は元氣か、母はどんな仕事しているのかと。答えをはぐらかせましたけど」

樋田の姓が珍しく、由緒正しそうなので気になったのよ」
 樋田は渡された名刺を裏返した。ローマ字で姓名の呼び方が書かれていて、義一と書かれた名はギイチと読む。「ギイチと読むのか、ヨシカズではなかった」

名刺の裏を見つけていた樋田にアキコはなぜ読み方を気にしているのかと尋ねた。
 「ヨシカギが気になった」とだけ答えた。

アキコは木暮源治が電話口で語った「ヨツチャン」をとっさに思い出した。翔はヨで始まる名前を探しているのだとその習性を不憫に思った。

会議室では自分の出現に松木が大変怖れたと、樋田も気付いた。彼の怖れに同期して座る樋田の眼差しも陰しく瞬いていた。「似ている」と。その上最期の言葉はマツヨ、彼の姓は「松木」に近い。

男からは名字の由来や実家の住所住まい、家族の状況にまで質問が飛んできた。それほどの子細を気にするのは何の証か、松木とは母が明かさなかった実の父なのか。
 考えすぎだ、他人の空似ってあるじゃないか、疑っては否定して目をしばたきさせた。ギイチと読むと知って「似ていると思ったのは錯覚、少しも似ていないさ、赤の他人」

あっさり彼を否定した。なぜ否定したのか。
 生まれて二十余年、接触を試みず名乗りも上げず姿も見せずなら

ば、実父として確認したい、会って見極めたいなどの気持ちは持てない。

突然出合いの舞台に引き出された二人は、その状況を受け入れられず、翔が否定し松木も翔を否定し、互いに相手を否定した。

会議にはアキコが同席していた。彼女は二人が酷似していると気付かなかった。見比べる機会は幾度もあったし、松木をしつかりと、凝視とも言える視線で見た時間もあった。二人が似ていると感じても親子と推察するには至らなかった。

二人を別個の人格で隔離したい、二人は二人として付き合いたい、その気持ちがあったのだ。

後に、二人を一人に合体する錯覚がアキコを襲った。彼らは親子以上に近く、二人とは幻覚で、たった一人の個体だと幻想した。

事務所に戻り、松木は会議の場面を思い返していた。手渡された名刺を表と裏に見返してはジンテックの二人を思い返していた。

「樋田翔、トイダショウと読むのか」怖れていた姓ではない。

「インターン研修なら二十一か二十二、歳はあう。生まれた地は女から聞いた住所とは離れた所だ。両親がいる、地元で店舗を構えているとも言ったな。」

他人の空似だよ。これ以上は考えない」

実家に戻ると書き置きを残し出奔した女から連絡は一切なかった。子がおろされたのか生まれか、産んだなら男か女か、松木は知らない。女の腹に子が生命の灯をともしたのは事実で、なんの知らせに接しなかったあげくに「女はおろした」と決めつけた。

「出奔したのはおろす為に違いない。もしも産みおとしたのならば、風の便りでもあるし、認知してくれ、あるいは幸せよ会いに来てなりの一報でも寄せられる」

その替わりに彼は生まれなかった子を夢想していた。女が去ってから二十二年の間、息を吸うのは忘れても、生まれていれば成長した子の姿にかける想いは忘れなかった。

そして樋田に会ったとたん、その想いまで否定した。

「地の底を這い蹲っていたらいいのだ。水子王国に住むのならそれは鬼、この世に現れてはならない」

会いたいと待ち望んで、想像していたその影と姿の若者が目の前に現れたとは松木は認めなかった。「水子王国に帰れ」と。

別の名刺を取った。

「島田明子、アキコと読む、惹かれる。私は鼻柱の強い女が好きなのだ。こんな自己分析は大間違いだ。私は気質で惚れるのではない。」

表情と眼差し、歩く仕草、動かす手の仕草に惹かれるのだ。表情に惹かれるのだ。敵しい光を放つあの眼差し、アーモンド形の目つき、とんがった鼻が少し上向きに座りつく、膨らみ加減の頬と真っ赤な唇。

そして体だ。アキコは身体で対話表現する、それはいつも挑発だ。しつかりした肩と胸の高さ、腰の回りの丸さ、尻の膨らみ、太めの股と脚

打ち合わせレポートをまとめ上げると七時をすぎた。やり残しは残っていたが、仕事には潔いアキコは「継続観察に回す」と切り上げた。窓の外を見て、

「今は夕方、自転車乗りの出番、バイクライダーのカワイイ女よ、はよ外に出え」と促す空は夕焼け赤焼け

窓の外は薄茜色に染まった一面の夕空だ、仕事を離れるもう一人の自我はサイクリストアキコ、茜の空の裏に夜の闇が迫ると知るからに、肺は膨らみ心臓はドッキとうごめいた。

「歩く者の流れが消える、道ふさぐ人影が見えなければ、ちよっぴりスピード上げる。川の風は私の背を優しくそっと、もっと速く進めるよと押す。

ペダルを強く漕いだらぐつと速度が伸びるのはいつも夕方。でも調子に乗ってはダメ。土手は暗闇、何が起こるか出てくるか。

一メートル先だつて、十センチ先だつて見えない」

追い風の期待と妨害飛び出しの戒めを噛みしめて、いそいそと着替え室に下りた。スポーツギア上下をきっちりきつく女身にまとい事務棟を抜け出した。昼のぬくみを孕む空気は冷たさに吹かれて、夕まぐれに何処かに消えた。

迷彩ジャージとピンクタイトのアキコが通用口を転がり出ると、頬と首筋にすぐに夜と知らせる一吹き風の風がすーと抜けた。

ぶるりと震える余裕を許さず、小走りをそのままに駐輪場に向かう。すれ違う男などはいないからこの前の朝みたいに、出会い頭にぶつかると事故に出逢わないのは幸いだ。西日の最後が差し込む駐輪場で、自慢のロードバイクは女主人を待ちくたびれていた。しかも深紅のきらめきは朝の別れよりも増す輝き、夕日のオレンジ色に染まれば深紅がマイカ色に輝いた。アキコはうれしかった。

車道までの二十メートルをバイク引いて進む。しつしつと目指すは晴れの聖地、信徒共は口うるさいバイク教徒、崇める邪宗のバイク教壇は多摩の川原、土手の上は唯のアスファルトにすぎないけれど、長い祭りの舞台がこしらえている。

シクリスト狂信者どもが集う通過儀礼の回廊である。チャリを連れて土手に参上さえすれば、夕べの祭りに参加できる。ペダル漕いで

で脚踏ん張ってのスピード三昧、信仰気分はなんて厳かで、これほどまでに汗かきのだろうか。
歩きの道はもう少し、地を這いながらバイク殿を押しして歩く屈辱も五十メートルだけ甘受しなければならぬ。

青に変わった信号で「さあ出発」と発車の間際、アキコの前に黒い影が飛びだした。通させまいとその黒影は立ちはだかつて、怒髪で両手掲げるのは鬼か、アキコに迫った。

「汝、罪深い毒婦この場を抜けるは許されないぞ。お前は成敗されるのじゃ。」

いつもツンツン冷たくて、すっぱりとそよ素っ気なくて、さあと見てよとししやなりと廊下をしゃり歩く。

汝の風体は、足取りも腰振りもあだな淫ら姿だ。その上なんとチヤリまたぎのぴっちり服、独身ヤロ―共には見るだけ毒、ならば見せるだけ罪だ。俺様なら見ても良いけど。
汝を流し目そそのかしが誘惑の素乱罪で告発だあ―

立つ鬼の影に目をこらしたらなんと度会、マーケティング部門長だった。昨日樋田を連れて採用の案件の打ち合わせを持ったばかり。その顔テラリと赤く光る、怒り髪を吹き上げる勢いだが、姿はサラリーマン的やるせない風情にひたすら留まる。赤い顔は酒をくらっているだけだ。

すり抜けを試みたアキコにそうはさせまいと度会はハンドルを握って「一緒に飲もう」と訴える。

鬼の正体はお邪魔虫、その変身に笑うアキコ、反論する。

「ご機嫌よろしゅう、地獄の鬼すらしのぐ渾身の腕力、独身娘の帰り道を塞ぐなんて不道徳の不謹慎よ―」

返答の最後にアキコのとっておき、目もと千両をサービスした。

ナツメ形一重の瞼が、クルリンと開いてパチリンとゆっくり閉じた。これが効いた。ねっとりウインクにあらがえる抗体をお邪魔な赤鬼こと度会が身に備える道理がない。

ぐらりと足元が崩れて意識も朦朧、ハンドル掴んだ右手が崩れてだらり離れた。「アキコ姫エー―」

ウインクの一閉じ一開きが毒婦を姫に昇格させた。

「姫エー、あああ、あちらをご覧なされ―」

抜け出てきた公園の芝生を指さした。八重桜の古木が並ぶ一角、盛りと咲き乱れる夜の花、渡り提灯のぼんやり照明の下、男女割りも程良く混じる一団が楽しげに語り、ビールは大瓶に一升瓶で差し酌手酌で飲み交わしていた。

「もはやシリツ中央公園ではないですぞ。好漢共が占拠したからに

はシリツのリヨウザンバクだ。この世に巣くう悪漢悪女ら一匹残さず天網にからめ、改悛のお慈悲かけるお仕置きで、仁と徳とで愛に誠を知らしめる、シリツお裁き場なのだ。

そこでお姫、今こそジーンテックで一番の悪辣女史を懲らしめんと、あちらに控えるヤセ鬼やブットイ鬼どもが手くすね引いておる」
 「おー怖い。予算の欠乏で窒息の市がこれほど立派なりヨウザンバクをよくも招いたこと」頬を丸く膨らませてアキコも吹き出した。
 「アキコ姫、ダイハチチャリ引くのを許そう、しかし向かうはこの先のピンボ―市道デコボコの引かれ道ではない。かのお仕置き場、ぐい呑みなみなみ媚薬ならばの駆けつけ三杯、ぐい―と呑んでの効き目あらたかで、チャリ逃げは断じてこの場で許されぬ。あの流しウインクを儂に見せたら許しても良いかな」

「ダイハチチャリだなんて、これはロードバイクというのよ。そのうえ私に媚薬のお仕置きですって。なんて魅惑的なお仕置きね、でもアキコ成敗を祈るなんて間違えている。お月様は正しいからアキコサイクリストはスピ―ドガールだけど、純情貞淑よと訂正されるわ。ほうら、雲から月が顔を出したわ。アキコに天佑あるけど、天誅なんてありませんよ」

「しかしなあ姫、人事部のアキコほど、苛斂誅求を地で行く悪女は他にはいないと、誰かさんがバラしてしまったぞ」

同じフロア人事の隣席、庶務の高野課長が紙コップを口先に傾け、車座の輪の中央で左手をアキコに振っていた。

「まあ、課長までが入って。私の魔女ぶりがばれてしまったのね」
 自転車の向き先をかえて、公園に進むアキコに度会は喜び大手を振り上げ

「女妖怪、いや違った御姫様が絡め取られたぞ」上機嫌で合図した。

(ツンブクツ 第一部の了)